

歩兵第八十聯隊史

(東部ニューギニア戦線)

昭和56年4月18日

歩八十会連合会

序 文

古川君は、所属 80 聯隊と共に東部ニューギニアの戦闘に参加した数少い生還者の 1 人である。

戦后 30 余年経った今日、ニューギニアに於ける聯隊の行動があまりはっきりせないため予て関係者の中からもっと詳細な戦闘経過の資料を望む声を聞かされた。古川君は何とかしてこの要請に応えたいと、乏しい資料を基に忙しい仕事の傍ら情熱を傾けて資料の蒐集に取り組み、今回遂に完成を見たことは御同慶に堪えない。あらゆる悪条件を克服して 2 年数ヶ月に亘り勇戦奮闘、随所に死闘を繰返えした聯隊の行動を作戰経過の日時にあわせ各時期、各部隊毎によくまとめて収録し、又われわれの予て非常な関心事であった軍旗の最后を具体的に解明するなど、誠に得がたい資料と思う。

御遺族や生存者の方も日頃の願望が叶い、恰も暗夜に光明を得た思いでこれを読んでいただけるものと信ずる。

本書が南暎の戦野に散った 5 千の戦友の遺勲を永く後世に語り継ぐ糧となり、更に又いつまでも英霊の崇敬奉仕の資とならんことを希ってやまない。

茲に本書の完成をよろこび、編集者及協力者の苦勞と努力に対し心から感謝の意を表する。

野 添 勲

第Ⅱ次大戦時東部ニューギニアにおける 歩兵第八〇聯隊戦闘経過概要

原駐屯地

朝鮮大邱府

聯隊本部

聯隊直轄中隊（聯隊砲、速射砲、作業、通信）

第一大隊

第二大隊

朝鮮大田府

第三大隊

（昭和55.4.作製）

作成の経緯

「聯隊はどうなったのか……」との素朴で而も限りない母隊愛に溢れる聯隊諸先輩の御心情、御要望の一端にでも応えるべく、昭和51年7月に取り敢えず急ぎ取り纏めた「歩兵第八〇聯隊のⅡ大戦時、東部ニューギニアにおける戦闘経過概要」がありました。是は当時既に30年余の星霜を経ており、生存者の記憶も定かではなく、記録や資料も少なく、従軍時の最も若かった世代も年移り既に高令者に分類される時代になっていた等々、諸先輩の御要望には仲々副い難きを恐れ乍ら一部の方々の資料御送附等、御協力を戴き粗雑脱漏を承知の上で敢て作成した内容のものであります。また、これは昭和52年4月の歩兵第八十聯隊合同慰霊祭及び献木行事に際し作成された「歩兵第八十聯隊史」のニューギニア編の資としたものです。

次いで今回、昭和55年初頭、「前に作成したものを基礎として次回の合同慰霊祭までに、もう少し詳しく記録して遺族の方々や生存者に読んで戴けるようにしたらどうか……」との御指導がありましたので、主として事実関係の年月日の確認等の為 防衛庁戦史室編「南太平洋陸軍作戦」を参考にして、関係資料等を併せ検討使用して纏めたものであります。

もとより脱漏、間違い、更に挿入すべき部分等多々あることとは思います。もし御指摘、御指導があれば修正の労は惜みません。

尚、生存者の記録中にある戦死(病)者の氏名等は出来る限り記入しました。

以 上

資料等について御協力下さった方々

安 部 龍 三 氏
若 狭 修五郎 氏
川 嶋 五 郎 氏
江 口 幸 雄 氏

(編者手持メモ)

昭. 55. 4.

編者 古川 記.

歩兵第八〇聯隊行動概要

厚生省調査課保管
「歩八〇留守名簿」中より
(昭48. 4. 23)

昭和18. 1. 5. 大邱出発

// 18. 1. 23. ウェワク（主力）上陸

// 18. 3. 12. ハンサ（一部）上陸

// 18.1～18.2. ウェワク飛行場整備

// 18.3～18.7. マダン地区に前進しフィニステル山系道路整備作業

// 18.8～18.12. フィンシファーフェンに20師団の先遣部隊として前進、昭18.10.
師団主力に合しフィンシファーフェン作戦

// 18.6～18.12. この間第1大隊は6月よりラエ・サラモア作戦、12月聯隊に合す

// 19.1～19.4. シオよりガリ・マダン（以上は「ハ」号作戦）及びハンサを経
てウェワクへ

// 19.5～19.8. アイタペ作戦

// 19.9～20.5. ブーツ地区警備及び邀撃戦闘

// 20.6～20.8. 山南に転進し邀撃決戦

総 損 害 5159名

作戦参加総人員 5258名

生存内地帰還 99名

註

- 編成人員+補充員 約1,000名
- 帰還者には朝鮮人志願兵17名を含む
- この他に中途帰還（傷病他）者がある
- ムッシュ島出発、帰国したものは105名
99名との差は帰還船内における死亡
と思われる

感 状

第 1 大 隊 ラエ・サラモア作戦に対し単独に

フィンシファーフェン作戦に対し 師団内部隊として

アイタペ作戦 に対し単独及び師団内部隊として

歩兵第八〇聯隊の東部ニューギニアにおける戦闘を顧りみて

大東亜戦争中屈指の難戦と言われる東部ニューギニアにおける作戦中、その主なる激しい戦闘即ちマーカム河谷・歓喜嶺地区、ラエ・サラモア地区、フィンシファーフェン及びダンピール海峡西岸地区、アイタペ作戦坂東川地区、全東方海岸地区、アレキサンダー山系山中・山南地区の戦闘あるいは、サラワケット越え、ガリ転進山越え等に聯隊はその主力又は1部がすべて参加した。“悲惨で而も苛酷”、その中で歩八〇の将兵は歩兵として終始一途に闘った。第十八軍（在東部ニューギニア、第20師団、第41師団、第51師団基幹）は昭和20年7月25日 軍としての玉砕命令を発令した。孤島の守備以外の大陸において、軍としての玉砕命令を出したのは建軍以来第十八軍のみではないかと思う。東部ニューギニアの戦闘が如何に苛酷で長期の孤立した悲惨な戦いであったかを物語るものである。出版・言論界でも採り挙げて真相を伝えていないし、帰国の将兵も多くを語ろうとはしない。日本国民も知らないままにその実情は過去の闇の中に消え去ろうとしている。

1. 地形気象等

- (1) 地形は峻峻、山岳重疊、平地は少なく いわゆるジャングルに覆われ、たまたまある平地には身の丈あるいはそれ以上の雑草が繁茂している。大草原は数十軒に及ぶこともある。ジャングル内は土人道以外は容易に通行できない。大部隊の移動は極めて制限を受ける、道路は土人道があり日本の畦道のようなものである。但し土人等として重要な道路の入り口は隠していることがあるので土人が居ないと判明しない。まして地図が無いので尚更である。
- (2) 無数の大小河川があるがほとんど橋はない。上流山岳地帯に降雨があると下流は数十哩の水位差で激流が押し寄せすべてを押し流してしまう。また世界有数の多雨地である。第1次世界大戦前迄はドイツ領だったが、さすがのドイツも匙を投げた いわく付の土地である。
- (3) 悪疫流行の瘴癘の地である。（マラリヤ、アミーバー赤痢、熱帯潰瘍、象皮病他多くの皮膚病等々）
- (4) 住民は少なく、物資は土人の農園のタロー芋、さつま芋等の芋類、とうもろこし、野菜、バナナ、パパイア、椰子の実、位で極めて少ない。豚、鶏を少々飼っている。

2. 戦 闘

- (1) 地図は聯・大隊長に $\frac{1}{80万}$ 位の外国製（傍線）入り地図が各1枚で、とても第一線歩兵の戦闘に役立つものではなかった。常に自らの足で凡て敵情・地形を一々確認する要があったし、そんな暇がない時（この場合が多かった）は全くの手さぐりによる攻撃、防禦の連続であった。
- (2) 全期間を通じ 歩八〇 の頭上の制空権は100%敵に在った。このことはジャングル内における数少い土人道外の行動の困難と相俟って、機動、展開、戦闘、補給等部隊の凡ゆる行動に甚大な影響を及ぼした。また、幾百回とも知れない攻撃防禦の戦闘間 航空機による直接協力を受けたこともなく、砲兵の第一線進出による零距离射撃や各門数発の短切な支援射撃以外砲兵の支援射撃もなく、殆んどが歩兵独力による戦闘であった。
然し、日本軍の歩兵は真実 精強だった。
- (3) 米・豪軍の歩・砲・空の連繫は まことに見事だった。

3. 補 給

- (1) 装備は大邱・大田出発時携行したもので、一部、フィンシファーフン作戦後ハンサ地区結集時及び坂東川戦闘準備中に補給されて終始した。
- (2) 馬匹は大邱・大田に残置した。是が為 歩兵砲、重火器、通信器材他凡て担送で戦闘に従事した。
- (3) 在ニューギニア 3 年余の間 塩をなめたのは延半年位で米を食う事は第一線歩兵としては夢又夢であった。後方司令部では潜水艦輸送も実施し、担送による前送にも努力したのでそんな事はないと云うかも知れないが認識不足も甚しい。連続第一線で敵と戦闘していた 歩八〇 の実情は真実このようであった。「あゝ、新米の銀メシを濃い豆腐の味噌汁で腹一杯食いたいなあ……」ジメジメしたジャングル内でよく皆が口にした一節である。
- (4) 補給の杜絶により食えるものは何でも食べた。第一線歩兵は土人の農園探しに出かける暇もなかったし、仮りにあったとしても 1 ケ小隊位の人間が一回採取した跡は殆んど何も残っていなかった。

4. そ の 他

戦闘、補給等すべてを含めて状況が悪化して極限状態に陥り而もそれが長期に亘った時、人としての戦場心理については参加者は種々多くの示唆を受けた事と思う。

第 II 次 大 戦 時 歩兵第八〇聯隊戦闘経過概要

摘要：(18. 6.) のように () 内に年、月を記したものは他部隊に配属中を示す

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・速射砲・通信)	第 1 大 隊	第 2 大 隊	第 3 大 隊	摘 要
○大邱・大田出発 馬匹残置	昭 18. 1. 5 大 邱 出 発 聯隊長 三宅貞彦大佐 18. 1. 7 釜 山 港 出 港 宮崎丸 (10,500t 欧州航路貨客船) 途中パラオ寄港 2 泊	18. 1. 5 全左 大隊長 神野音市大尉 18. 1. 7 全 左 新玉丸	18. 1. 5 第 7 中隊 第 8 中隊大邱出発 18. 1. 7 釜 山 港 出 港 7 中：仮装砲艦 尋山丸 8 中：駆 逐 艦 主 力 大邱出発 大隊長 菖蒲嘉八少佐 18. 1. 10 主 力 釜山港出港 昭南丸 佐伯湾集結 18. 1. 22 主 力 パラオ上陸 待機 18. 1. 23 第 7, 8 中隊ウエワク上陸 全 左	18. 1. 7 大 田 出 発 大隊長 内山日出丸中佐 18. 1. 10 釜山港出港 大日丸 佐伯湾集結 18. 1. 23 パラオ上陸 待機	
○聯隊主力ウエワク 上陸, 附図第 1, 2	18. 1. 23 東部ニューギニア ウエワク上陸 ウエワク飛行場建設作業	18. 1. 23 全 左 全 左	18. 3. 初 第 7, 8 中隊 (聯本に同じ) 18. 3. 12 東部ニューギニア, ハンサ上陸 聯隊長の指揮下に入る 第 7, 8 中隊復帰 18. 3. 下 ボガジム着 フィニステル山系 道路啓開作業 クワトウ以東 山間部担任	18. 3. 12 東部ニューギニア, ハンサ上陸 聯隊長の指揮下に入る 18. 3. 31 アイオア着 フィニステル山系 道路啓開作業 アイオア〜マダン間海岸道担任	
○聯隊主力ハンサ地区 次いでマダン, クワトウ地区に集結 附図第 2, 3	18. 3. 初 ウエワクよりハンサ地区に進出, 聯隊本部ビリビリ 第 2, 3 大隊を掌握, 通信中隊主力をフィニステル 山系啓開中の柳川兵团 (第 20 歩兵团) に配属 次いでクワトウに進出, フィニステル山系の 道路啓開 作業。聯隊本部クワトウ 18. 5〜6 頃より空襲激化 第 5 中隊をマーカム河谷ゴイド付近に派遣, 次いで第 1 大隊をサラモアに派遣し第 5 1 師団長の 指揮下に入らせた。	18. 3. 初 ウエワクよりハンサに, 次いで フィニステル山系中 に入り 道路啓開作業, 山間部担任 (18. 6.) ラエ・サラモア地区 (51D) の 戦況悪化に因り 51D に配属 を命ぜられマダンより水路 を啓開しつつサラモアに急行 し戦闘に参加。ウェルス付近, ボブダミ高地, 小倉山等々顕著 な戦果を挙げ感状に輝く。 ※サラモアへの移動にあたり 第 4 中隊 (若狭隊) をして, マダン〜フィンソフア〜フェン 間 の舟艇根拠を占領させ, その掩護下に大隊主力は 舟艇機動を実施した。 第 4 中隊は爾后カノミ警備 隊として聯隊主力が後退し て来る迄その任に当った。	18. 5. 初) 第 5 中隊 (森貞隊) (約 160 名) を警戒並びに 搜索のためマーカム河谷の ゴイド付近に派遣 (師団直轄) ※是に対する 補給の担任は 80 i (実質 II), 130Km に亘る急峻な土人道 に 13ヶ所の中継基地を設定 し約 200 名による担送補給 を実施		○クワトウにて通信中隊細松軍曹 以下 5 名爆撃により戦死 ○1 日平均 2 合 5 勺以内 輸送難の為, 道路作業稍々困難 ○ボブダミ高地夜襲 (第 2 中隊) にて中隊長 中島清行中尉, 松延見習士官戦死。 平川少尉片目失明, 永江少尉 足部負傷, 幹部全滅。 ○IbiA 小隊長柏木平八郎少尉 戦死 ○通信中隊無線分隊長西口伍長 戦死 ○第 5 中隊竹森少尉 敵監視哨 に突入戦死 (18. 6.) ○第 5 中隊長森貞中尉負傷後送 (18. 8. ?)
○第 5 中隊 次いで 第 1 大隊を派遣 附図第 1, 2					

部隊区分 全 般	部隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信)	第 1 大 隊	第 2 大 隊	第 3 大 隊	摘 要
○師団の先遣聯隊としてフィンシファーフェンに急行 附図第 2, 3 △敵は 18. 9. 4 ラエの北方ホボイに上陸 ○フィンシファーフェン地区に集結, 第 1 船舶団長の指揮に入り警備に入る 附図第 4, 5 ○51Dはサラワケットを越えシオ・ナバリバに向け転進開始 附図第 1, 2 △18. 9. 22 敵の 1 ケ師団半アント岬に上陸 附図第 2, 4, 5 ○聯隊長「サ高地」到着。上陸した敵を駆逐するため渾身の努力を傾けた 附図第 4, 5	18. 8. 14 (?) ラエ・サラモア地区の状況一層の悪化に伴い先遣聯隊としてボガジムに集結, 海岸沿いの土人道を 1 本縦隊で前進, ナバリバより大発に分乗, 沿岸山地に潜在する敵監視哨の狼火を気にし, また付近海上に横行する敵魚雷艇を警戒, 各艇毎戦闘準備を整へ, 夜間舟艇機動によりフィンシファーフェンに向い急行した。途中敵のホボイ上陸を知った。 (-) I, 5/II, (+) 1 中 / 26A) 18. 9. 初 フィンシファーフェンに上陸, 第 1 船舶団長の指揮に入り, 同地南方ロガウェン高地付近に集結。 次の処置をとった。 II (- ¹中) : モンギー河谷付近に前進 モンギー支隊となり搜索警戒 III (- ²中 MG1 小) : ロガウェン高地に陣地占領 第 9 中隊 (+ MG1 小) : アント岬警備隊 第 12 中隊 : ジョアンゲン警備隊 聯 隊 本 部 : ロガウェン高地西側斜面 18. 9. 22 敵のアント岬上陸に伴い聯隊は全兵力をサッテルベルグ高地付近に集結する処置を取り, 聯隊長は第 3 大隊の後方を日没後直轄中隊と共にロガウェン高地を出発。ブバイ河の上流で渡河, サッテルベルグ高地に急行。 18. 9. 23 昼過ぎ サッテルベルグ高地 (以下「サ」高地) 東端教会跡に到着, III 長の報告を受けると共に全般の戦況, 地形を観望し次の処置をとった。 II : 「サ」高地 < ヘルズバカテカ道に沿い戦闘加入 敵情, 地形の搜索, 第 9, 12 中隊を復す。 1 中 / 26A : 「サ」高地西側に陣地占領 第 1 線に協力。	※サラモア地区で激戦中 (51D に配属) ※第 4 中隊はカノミ付近の警備中 (18. 9. 10) 51D の転進命令によりサラワケット山 (標高 4000m 以上) の峻嶒な山嶽地帯に入る。道なきジャングルの中, あるいは崖をよじ登り夜間の仮眠には霜やみぞれが降り, 食なく草根木皮・昆虫類等食えるものは何でも口に入れての難行軍で兵力激減す。雨に打たれてジャングル内の行軍は肌寒い。	18. 8. 15 ボガジムに集結, フィンシファーフェンに向い陸路急行, ナバリバより舟艇機動 (第 5 中隊欠) ※第 5 中隊はマーカム河谷で戦闘中 (中井支隊に配属) 18. 9. 8 ロガウェン高地着, 1 泊後モンギー河谷に向う。(約 1 週間) 18. 9. 16 (?) モンギー河右岸着 陣地占領と共に搜索警戒に入る。(モンギー支隊) 18. 9. 22 聯隊命令により至急陣地を撤し追尾する小敵を撃退しながらサッテルベルグ高地に急行。	18. 8. 15 全 左 18. 9. 8 ロガウェン高地着, 主力は直ちに陣地占領, 第 9 中隊 (沢村隊) をアント岬, 第 12 中隊 (三宅隊) をジョアンゲンに派遣 ※大隊長 内山中佐 病気のため爾後聯隊付高木中佐が指揮をとった。 18. 9. 22 聯隊命令により陣地を撤し先遣大隊となり昼過ぎよりサッテルベルグ高地に向い出発, 第 9 中隊 (沢村隊) は上陸した敵と交戦, 接触を保ちながら逐次カテカ西側台地方向に後退していた。 18. 9. 23 大隊長は 10 時過ぎ「サ」高地に到着, 第 10 中隊 第 11 中隊を「サ」高地—ヘルズバ, 「サ」高地—カテカ道に沿い逐次戦闘に加入させると共にアント岬警備隊 (第 9 中隊) との連絡確保の処置をとった。	○道路啓開作業のため相当広範囲の山嶽地帯に分散していたため集結に時間を要した。 ○ジョアンゲンはフィンシファーフェンからシオ方面に対する後方連絡線の要衝。

部隊区分 全般	部隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信)	第 1 大 隊	第 2 大 隊	第 3 大 隊	摘 要
○Ⅱ(-)「サ」高地に到着，Ⅲの左に戦闘加入 ○カテカ，ヘルズバ，タレコ 付近一帯の小戦 附図第 4, 5 ○クマクワの戦闘 附図第 5, 6 ○師団の第 1 次統一攻撃 附図第 5, 6 (79i は，カテカ，ソング河口に向け攻撃)	18. 9. 27 Ⅱ(-)の到着に伴いソング河左岸に攻撃前進させ敵情地形の搜索，爾後右岸に移転させⅢと連けいし敵情地形の搜索並びに攻撃にあたらせた。集結した小銃中隊は 7 ケ中隊でその内，1 ケ中隊 (第 9 中隊一沢村隊) は敵の上陸時の戦闘で大損害を受けており実質 6 ケ中隊 + OX の兵力で 1. 5 ケ師団を相手に戦闘を続けた。 制空権は 100 % 敵にあった。 ※ 9. 23 夕頃 聯隊長はシン北方本道の北側約 100 m に位置していた。聯隊長は敵情・地形に不明の点が多いが「サ」高地——ヘルズバ道にそい敵の準備未完に乘じ軍旗を奉じ，ヘルズバに向い夜襲を敢行し敵を撃滅すべく準備中の所へ師団長より次の要旨の電報を受領した。「80i は「サ」高地周辺の要地を確保し師団の進出を掩護し師団の統一攻撃を待て……」是により ①「サ」高地周辺の要地の確保 ②小部隊の頻繁な出撃により敵をしてなるべく永く海岸付近に拘束する ③積極的に敵情地形の搜索を行う等 処置した。 同夜半，聯隊本部を三宅台中央本道南側粗林中に移し積極的な指揮をとった。 この頃 師団作戦主任参謀高橋中佐が来隊した数日して，聯隊本部を「サ」高地監視山西方約 500 m 本道北側粗林中に移した。	※サラワケット山系をナバリバに向け機動中 (18. 10. 10) ※ナバリバにおいて師団に復帰，船工第 5 聯隊長の指揮に入り警備	18. 9. 27 「サ」高地着，直ちにソング河左岸，河口近く迄前進して敵情地形の搜索，小敵の駆逐に当たった。10 月初右岸に移しⅢと連けいして，主としてカテカ方向に向い搜索攻撃 ※敵情地形の搜索はジャングル内の単独兵の行動も仲々困難なことから土人道を敵と接触する迄前進したり敵の電話線を辿りながら前進する等実施したが時間がどんどん経過する割には情報が入り難かった 18. 10. 14 (?) ジベバネンに対する攻撃準備 ①佐伯山東南 3 叉路より南に通ずる土人道の確保 ②上記土人道の山腹中間より部落東方へ出る迂回路の啓開 等	18. 9. 27 第 12 中隊 (三宅隊) ジョアンゲンより「サ」高地に到着 戦闘加入 18. 10. 初 Ⅱのソング河右岸への戦闘加入により「サ」高地——ヘルズバ道を含み同以南地区で敵情搜索，攻撃を続行。 ※敵情地形の搜索はⅡと同様であった。各所で斥候相互の軽戦が盛んに行われた。この間ヘルズバ付近に潜入した斥候が敵の指揮官幕舎らしいものを爆破した。翌日のシドニー放送は副師団長がヘルズバで事故死と放送していた。 18. 10. 5 第 10 中隊 (井上隊) はクマワに侵入した約 500 の豪軍を 5 日夕撃退，6 日引続きその東方高地に対し東面し，第 12 中隊 (三宅隊) はその敵の背後より協力して攻撃したが成功せず，クマワの線で対峙。 18. 10. 14 (?) ジベバネンに対する攻撃準備 ①「サ」高地——ヘルズバ道にそい 2 ケ中隊，クマワ，三宅台は各 1 ケ中隊で確保 ②ジベバネン南方，タレコ方面の搜索警戒	○第 8 中隊 田中見習士官 手榴弾被弾 全盲状態で後送 ○Ⅱ付 芝軍医 脚に砲弾を受けガス瘡痕 ○三宅隊 朽葉少尉 肺貫通銃創，後送
	18. 10. 14 (?) 80i はジベバネン部落の攻撃。攻撃は 16 日午後 4 時として準備を命ぜられ次の処置がとられた。 Ⅱ (- 1 中) : 主攻 主力を以て南面して攻撃 奪取，1 部で西面して攻撃 Ⅲ : 2 ケ中隊を以て東面して奪取 クマワ，三宅台は各 1 ケ中隊で確保 速射砲中隊 : 部落北端奪取後速かに進出 Ⅱの攻撃に協力				

部隊区分 全 般	部隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)	第 1 大 隊	第 2 大 隊	第 3 大 隊	摘 要
○ジベバネン部落攻撃 (師団の第1次攻撃)	18. 10. 16 予定通り攻撃開始 1 部落北縁は攻撃開始直後すぐ奪取した 聯隊長は部落——シキ川の中間迄進出して指揮したが その後進展せず、攻撃の繰返し、再三再四の夜襲も不 成功。 ※考えられる不成功の原因 ① ゴム林陣地の重火器の制圧ができなかった。 制空権なし、是は砲兵支援火力を極限した、最 初の十数発のみ、敵の砲兵は重迫を含み数十門 で猛射。 ② ジャングルのため軽易な迂回、奇襲等が極めて 制限された。 ③ 夜襲の失敗は枯れたヤシの葉とジャングル。	(18. 11. 3) ※カノミ、ラコナ付近の警備 大隊長 吉川大尉 神野大隊長 サラモア にて負傷後送のため	18. 10. 16 予定通り攻撃開始 1 部落北縁は攻撃直後すぐ奪 取。MG, TA を推進し攻撃 するも進展せず、反復攻撃、 夜襲も不成功。 右中隊(第8中隊)は竹藪 の中を接敵、手榴弾戦を交 え攻撃するも不成功。 再三の夜襲も不成功。	18. 10. 16 予定通り攻撃開始 1 本道両側の竹藪あるいはゴ ム林陣地の南面は射界を清 掃、簡易鉄条網設置等の為 攻撃の反復、夜襲にも拘わ らず成功せず。	○第8中隊長 柏原中尉 手榴弾戦中 被弾戦死 ○速射砲中隊長 本間中尉 部落内北側縁端付近で戦死 ○聯隊旗手 渡辺少尉(56期) 大腿部に重傷後送(聯隊本 部に重迫の集中射撃を受け た)
○師団の第2次攻撃 (師団主力(79i)は ソング河左岸ノン ガカコ付近に集結 してソング河口付 近を攻撃) 附図第5, 6, 7 80i「サ」高地防禦	18. 11. 4 1 1月3日80iはジベバネンの攻撃を中止して第1線 を以てシン付近、主力を以てクマワ付近、バランコ付 近を占領し「サ」高地を確保すべき命を受け4日夜に 入り行動開始、それぞれ順調に陣地占領に入った。 配属：1中/26A, 21M(迫)大隊, 20P.		18. 11. 4 夜に入り、佐伯山を中心と する地区に移動、陣地占領	18. 11. 4 夜に入って移動開始 三宅台：本道南側 第11中隊(黒崎隊) 本道上 第12中隊(三宅隊) 第1線はシン南北の線 三宅台西端 第9中隊(沢村隊) クマワ：第10中隊 (井上隊) 18. 11. 8 ジベバネン方面よりの敵の 攻撃、撃退	○三宅部隊主力は9月末の 連合軍上陸以来約2ヶ月の 戦闘行動、連日の砲爆撃、 補給の杜絶により傷病兵が 多く第1線中隊の兵力は約 50名 程度に激減していた。

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊（ 聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・ ）		第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要		
○ 18. 11. 9. 12時以降 「サ」高地一帯の 指揮は山田第 1 船 舶団長から 三宅歩 80 聯隊長 となった。 ○ 「サ」高地に対す る敵の本格的攻撃 始まる。 附図第 7 戦車出現	18. 11. 16	聯隊正面の戦況俄かに活況を呈してきた。 朝来 砲，爆撃一段と熾烈となり，三宅台正面に強圧 を加えてきた。 三宅台正面に初めて戦車が戦闘に参加した。				18. 11. 17	敵は午前 5 時半頃から攻撃 開始。 以後の経過は 附図第 7	18. 11. 16	○ クマワ正面（第 10 中隊） に集中砲撃（約 700 発） 18. 11. 17	○ 三宅台正面，クマワ正面に 強烈な攻撃を受けた。附図 第 7—⑤に初めて戦車が出 現した。肉薄攻撃で擱座さ せてもそれ以上の致命傷は 与えられなかった。速射砲 と聯隊砲も効果なく，一瞬 にして陣地直前に鋼鉄製ト ーチカが出現した感である ○ 第 11 中隊（黒崎隊）は三宅台 南側斜面を前進する敵と混 戦，大きな損害を受けた。 ○ 第 10 中隊（井上隊）の前進 陣地 （川崎小隊）玉砕 経過は附図 6	※敵の猛砲撃爆撃の例 18. 11. 19 三宅台の第 1 2 中隊 （三宅隊）の主陣地 400 ^m ×300 ^m に対しカテカ，ヘルズバ，フィンシ ファーフェンの 3 方向より重砲 4～ 5 門を含み，約 50 門の砲をも って午前 6 時から正 1 2 時迄 （腕時計を見て，カッキリ）の 6 時間の連続砲撃を受け，それ に重複して B-17 4 機編隊の じゅうたん爆撃を受けた。付近 のジャングルは全く開墾されて しまった感じであった。中隊長 三宅中尉は前夜からの敵情その 他から判断して，この事を予期 して中隊全員を後方の予備陣地 に退け待機させていたのでこの 砲・爆撃による損害は一兵も無 かった。
	18. 11. 20	「三宅支隊は玉砕を避け「サ」高地付近の一角を保持 し，状況止むを得ざれば明 2 1 日行動を開始し 1 部を 以てワレオ，主力を以てメリケオ（「サ」高地北西方 約 1 0 軒）附近に転進すべし」の師団命令を夕刻受領 した。 附図第 8 是にもとづいて聯隊命令を下達して行動方針，要領 を明確に示した。即ち師団主力の攻撃を成功させるた め極限に近い遅滞防禦戦闘を行い 1 日でも永く「サ」 高地を確保すると共に，急激な変化を避けながらワレオ・ メリケオに向う準備を命じた。特に敵が主攻を指向し 戦闘激烈を極めている第 3 大隊の大隊長 高木中佐 に 対しては通信中隊長 古川中尉 を派遣して聯隊長の意 のある所を詳細に伝え万全を期した。当時師団情報主 任参謀 高柳中佐 が来隊していた。	18. 11. 18	在「サ」高地の聯隊長の指 揮下に復帰を命ぜられた。 第 4 中隊（若狭隊）は依然 カノミ警備隊として残留			18. 11. 19	三宅台正面の第 1 2 中隊 （三宅隊）陣地に対し連続 6 時間に亘る熾烈な砲・爆 撃に続き戦車，火焰放射器 等を交え猛攻を受け，陣地 を取ったり取られたりの死 闘が続いた。 大隊本部は三宅台西端本道 南側疎林中			

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)		第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要
○「サ」高地を撤す △豪軍は 11.25 朝サッテルベレグ 部落に突入	18. 11. 21	敵の地上攻撃は少々緩慢の感 銃爆撃，砲撃は相変わらず熾烈			18. 11. 21	敵の動きは大して活潑でな かった。	18. 11. 21	敵情は活潑ではなかった。 聯隊命令により夜に入り敵 に察知されることなく主陣 地の線を「サ」高地南側に 移動 附図第 7	⊗この日の逆襲で豪兵 2 名を捕 虜とした。後日師団に送った が，戦後この 2 名の行方不明 が因で聯隊本部は戦犯指定を 受けた。後日解除 鮫島少佐は参考人として ラヴァウル に拘引された。 (昭 21. 12 頃帰国)
	18. 11. 22	師団長より「敵の攻撃に際しては主力を以てワレオ， I 部を以てメリケオに向け転進の命を受く。 敵の攻撃緩慢，ヘルズバ附近の高射砲から対地射 撃を受ける。	(18. 11. 22)	吉川大尉 (2 中隊) は師団 管理部長 藤井中佐 の指揮 に入り，西山付近の敵を攻 撃 附図第 9					
	18. 11. 23 (?)	夜に入り「サ」高地を撤し，マサンコ——フィオ—— 吊橋方向に転進。 フィオ，吊橋，クワンコ付近に集結，陣地占領， 斥候等の軽戦継続 附図第 5, 6, 8, 9	(18. 11. 23)	夕方 吉川大隊は附図第 9 — ④ — の一角を奪取したが その後 進展せず	18. 11. 23	命により夜に入り佐伯山付 近を撤す。	18. 11. 23	敵の攻撃激烈。あちこちで 突破され之に対し陣前逆襲 の繰返しで死闘の連続。 夜に入り命により敵と離脱	
			(18. 11. 24)	吉川山付近攻撃のため 林田部隊長 (79 i) の指揮 に入る 第 1 中隊 (中田隊) : 師団予備 のち攻撃に参加					
	18. 11. 26 ↓	師団より 80 i はなるべく多くの兵力をワレオ付近に 集結すべき命を受けたが 「サ」高地——ワレオ道の戦闘 フィオ付近 (11. 27 昼間) 戦闘 } 等を継続中 吊 橋 東 西 の 線 の 戦 闘 } であった。			18. 11. 27 ↓	吊橋，クワンコ付近の戦闘。	18. 11. 27 ↓	クワンコ付近の戦闘	
○クワンコ付近の戦闘 附図第 8, 9	18. 11. 30 ↓	師団より 12 月 1 日 吊橋より下流北岸に進出した 敵を駆逐すべき命を受け攻撃したが成功せず。 クワンコ付近の戦闘 クワンコ部落 12 月 1 日午前抛棄 クワンコ西北稜線 12 月 2 日 ~ ワレオ南方地区の戦闘	(18. 12. 2) ↓ 3	ノンガカコ西側稜線より ソング河北岸に進出せる敵 を攻撃して，三宅部隊の攻 撃に協力すべき命を受け 豪第 2 3 大隊の翼側を攻撃 し一角を奪取	18. 12. 3 ↓	ワレオ南方 約 500 m 付近 及びワレオ台上の戦闘。	18. 12. 3 ↓	全左，及びビランコ付近の 戦闘	⊗当時 第 1 線中隊の兵力は 中隊平均 30 名弱

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)		第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要
△豪軍ニューギニア において初めて 夜襲を行う (クワンコ西北稜線) △海岸地区では 11月29日豪軍 はボンガを占領し 強力な兵力で北上 を開始していた 12月13日・村上川 ○ワレオ付近の戦闘 附図第8,9 ○ガケ付近より 海岸地区における 後衛戦闘 附図第8,10	18.12.4	ワレオ付近の持久戦闘 徹底した遅滞作戦の実施 ※戦後の豪軍資料より見ても如何に攻めあぐんだかが判る。 師団主力(79i)の配備変更掩護のための必死の努力であった。			18.12.4	全 左	18.12.4	全 左	※ワレオに対する豪軍の強力不 断の圧迫を支えたものは 第20師団将兵の勇気と決意 のみであった。杜絶した補給、 体力の消耗、兵力の激減、 支援火力の皆無等々で変化の ある戦闘行動などとても無理 な状況になっていた。 (主として80i) ○Ⅱ本部 橋本軍曹、田中上等兵 負傷後退中 後日ナバリバには橋本軍曹は 現われなかった。
	18.12.8	師団命令により 朝、ワレオ抛棄 ・2200高地の戦闘 師団主力から孤立し、退路を遮断される危険を承 知しながら師団のため最大限の時間を稼ごうとの 渾身の頑張りであった。 附図第8,9 又、現任務続行と共にⅠ部を以て光山拠点占領の命 を受けた。	18.12.8	聯隊に復帰。2200高地の 戦闘、兵力60～70名(?)	(18.12.8) 14.	第5中隊(中井支隊、マー カム河谷) ケセワ付近の戦闘			
			18.12.13 夜	2200高地を抛棄し 光山拠点に向い機動	18.12.13 夜	全 左	18.12.13 夜	全 左	
			(18.12.15)	師団予備隊 ラコナ上流2Kmマサエン 河右岸ラコナ西方4Kmに向 い移動	(18.12.14) 18.12.15	師団予備隊 聯隊に復帰。光山に機動			
	18.12.16	正午以降行動を開始し、逐次ラコナ河北岸の犬山、 アイマロ、牛山、付近に配備を移行、現任務を続行 すると共に海岸方面への攻撃準備を命ぜられた。 当時光山付近に集結中だったが目標を変更、機動す。 附図第8,9			18.12.16	犬山、アイマロに向う。	18.12.16	全 左	
	18.12.19	19日払暁以降行動を起しガケ付近海岸道方面に前 進しガケ付近に於て敵の前進を拒否し、20日薄暮 より行動を開始し、敵の前進を遅滞せしめつつアゴ に至るべし、との命をうけ、海岸方面に向う。これ 以後師団の後衛となる。	18.12.19	聯隊に復帰。ガケ付近に 向い遅滞戦闘 ※第4中隊は依然カノミ 警備隊	18.12.19	ガケ付近に向い遅滞戦闘	(18.12.18)	師団命令により(-2ケ中隊) で右側警備隊となる。	
	18.12.21	マサエン河北方約6Km付近の戦闘	18.12.21	全 左	18.12.21	全 左			
	18.12.24	アゴ付近に後退 陣地占領、戦闘	24	全 左	24	全 左			
	18.12.27	ワリンガイ //	27	全 左	27	全 左			
	18.12.28	カノミ //	28	全 左	28	全 左			

部隊区分 全 般		聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)	第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要
△連合軍は 19. 1. 2 グンビ岬に上陸 附図第 2, 11 (20D, 51Dは退路) を遮断された) 									

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)		第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要
○ハンサ地区に集結 補充員，兵器弾薬 糧秣等受領 附図第 2	19. 3. 初	ハンサ東方ゴールド地区に到着。逐時到着する諸隊を掌握して次期作戦準備にかかった。	19. 3. 中	全 左	19. 3. 中	全左，山越えの結果約半数の 250 名程度となったが，追及者等を加え大隊は約 300 余となった。	19. 3. 初	全 左，次のように編成を変更。 第 9 中隊 永田中尉 第 11 中隊 黒崎大尉の予定を病氣追及中のため朽葉中尉とした。 この時第 12 中隊(三宅隊)は 20 名足らずになっていた。大隊長内山中佐追及により以後大隊の指揮をとる。	※ ゴールド集結より出発迄 1 日約 3 合の給食 ※ 19. 3. (?) 20D の補充員指揮官としてウエワクに待機中の安部大尉は軍命令により補充員，還送患者等を指揮してアイタベに至り 4 月上旬より同地警備に当たっていた。 敵上陸により東進してヤカムル付近より歩八〇のⅡ長として終戦迄大隊長であった。
	19. 4. 初	ゴールドにおいて大邸以来の三宅大佐は少将に進級，後任はラヴァウル地区警備隊長より井手篤太郎大佐が着任した。各中隊毎に宿営地で初度巡視を受けた。三宅少将はホルランジャより帰国の予定であったが，その後敵上陸のため内地帰還叶わず 20D の歩兵団長として終戦まで活躍された。					19. 4. 中	全 左	
	19. 4. 中	師団の先遣聯隊となりハンサ地区ダコイ出発。敵の絶対制空，制海権下海岸沿いの土人道を 1 本縦隊で昼間，合間を縫って急進。 ニューギニア最大のセビック河及びラム河の渡河を気にしながら前進したが幸い大発で渡河することが出来た。	19. 4. 中	全 左	19. 4. 中	全 左	19. 4. 中	全 左	
○アイタベ，ホルランジャの状況急迫 師団の先遣聯隊となり急進 附図第 1, 2, 13	19. 4. 22	ウエワク付近の海岸道を西進中 敵上陸を知り 急進に努めた。	19. 4. 22	全 左	19. 4. 22	全 左	19. 4. 23	コープ(セビック河口～ウエワクのほぼ中間)で敵のアイタベ上陸を知る。	○ブーツにて夜営中聯隊経理室に倒木のため 聯本 山口主計中尉) 死亡 I 本 小林主計少尉
○ウラウ付近の戦闘 附図第 2, 13	19. 5. 4	聯隊主力マルジップ到着，次いでウラウ付近で砲数門を有する約 300 の敵と初めて接触。							
	19. 5. 14 15	第 1 大隊のみで攻撃，撃退，その間聯隊砲で魚雷艇 1 隻撃沈，1 隻擱座させた。引続き西進，ヤカムルに強力な陣地のあることが判明した。	19. 5. 14 15	ウラウの敵を黎明より攻撃し撃退					

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)		第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要	
○ヤカムの戦闘 附図第 13	19. 6. 2 6	三宅歩兵団長指揮により、聯隊は東方より海岸道沿 い及び 3 ヤカムル南側より、78i (2ヶ大) は 80i に連けいしてヤカムル南西より攻撃殲滅した。陣地 は掩蓋、障害物を設置してあり当初は仲々進展しな かった。I 部兵力部署を変更し陣前 30 ^m ~ 50 ^m に 各種火器、火炮を推進し、4 日薄暮より急襲射撃と 特攻班による掩蓋銃座の爆破と共に突入海中に圧迫 殲滅した。	19. 6. 2 6	ヤカムの戦闘	19. 6. 2 6	ヤカムの戦闘 大隊長菖蒲少佐はマラリヤ と衰弱のためアイタベより 東進合流した安部大尉が 大隊長となり指揮した。 ※ 19. 6. 18 現在 総員 (ダゴイで再編時) 406 名 事故 (入院 54 追及中 84) 138 糧 秣 輸 送 地 26 現 在 員 242 (内訳) 将校 17, 准士官・下士 官 41, 兵 184 ・大隊本部 37 第 5 中隊 74 第 7 中隊 68 第 8 中隊 15 MG 中隊 48 ・小 銃 113 擲 弾 筒 8 軽 機 8 タテ器 5 自動小銃 3 擲 弾 銃 8 機関銃 5 手榴弾 約 600 (以上防衛庁戦史室資料)	19. 6. 2 6	ヤカムの戦闘	○ヤカムの戦闘にて朽葉中尉 両大腿軟部貫通で後送 ○大友軍医 脚部負傷 入院	
	19. 6. 7	部隊を整理すると共に西に向い積極的に敵情地形の 搜索を行う。この間次の本格的攻撃に備えて種々の 施策を実施した。 ①糧 秣 の 節 約 蓄 積 ・次期行動発起時各人が携行すべき責任量は 各人 3 升 (1/3, 15 日分) 実際は 10 日分となった ・日々消費し得べきは 2 合/日 以内 ・澱粉、現地物資の活用 ②歩八〇聯隊軍靴愛惜規定を発令しその愛用、代 用品活用を命じた。 ※ 19. 6. 末における兵力は約 1000 名 と戦史室資料 はなっているが実際に第 1 線で戦闘できるものは 600 ~ 700 も居たか疑わしい。								
○坂東川 (ドリヌモア川) の血戦 20D, 41D を併列 して 18A としては 最後の統一攻撃 附図第 13, 14, 15, 16	19. 7. 10 8. 4	昼頃からジャングル内の小径を通過し逐次攻撃準備 位置についた。この間敵の観測機がウルサク頭上を つきまとっていた。 午後 9 時 50 分 一斉射撃、続いて歩兵の強襲渡河が 開始された。我砲兵の支援射撃もなく自己の火力を 唯一の頼りとして開始した渡河攻撃は、準備された 敵の猛烈な火網により河岸、河原は一瞬の裡に凄惨 な修羅場と化し、死屍累々、山となり或は川に流さ れるもの数知れず。 聯隊は敢えて強襲を続行、約 2 時間後渡河に成功、 西方のジャングル内に突入した。	19. 7. 10	全 左	19. 7. 10	全 左	19. 7. 10	全 左	○第 1 中隊長 中田大尉, Ⅱ 近藤軍医 以下多数死傷 ○若林, 井村曹長 戦死 ○通信中隊 小谷准尉, 西口軍曹 戦死	

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)		第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要
⊕ 7. 13 米増援部隊 が坂東川左岸を南 下して旧陣地を再 占領した 附図第 14, 15 ○ アフアの攻撃 附図第 14, 15, 16	(7. 11)	夜明け前には四小原西方△53高地一帯を占領、夜明けと共に付近の掃蕩を実施。	(7. 11)	夜明け前 所命地点占領	(7. 11)	夜明け前 △53 高地一帯を占領	(7. 11)	夜明け前 所命地点占領	※ 19. 7. 17 頃以降 1 粒の米麦もなく戦闘間付近のジャングル草 (日本のフキに似て身の丈位) 他、野草、木の芽等 食えるものは何でも手当たり次第口にした。 又、連日の雨に叩かれ機動、戦闘を繰返している将兵の疲労はその極に達していた。
	(7. 12)	命により海岸方面の敵増援部隊に対する攻撃並びに掃蕩実施 (20D の右に連けいした 41D の攻撃は遅延して 1 2 日午後に坂西川右岸に到着した状況で、80i の右に友軍は居なかった——附図第 14)	(7. 12)	全 左	(7. 12)	全 左	(7. 12)	全 左	
	(7. 14)	命によりアフア南西五軒家地区に向い反転開始 (師団が総力をあげてアフア及び△56 攻撃のため) 附図第 16	(7. 14)	全 左	(7. 14)	全 左	(7. 14)	全 左	
	(7. 18)	歩兵団長指揮でツル陣地に対しⅡ/80i はⅢ/78i と共に薄暮より攻撃、約 300 の敵を撃退、以後同地北方地区に転移して部隊を整備中、米軍は再びアフア及びツル陣地に侵入し堅固に陣地を占領した。			(7. 18)	ツル陣地の攻撃			
	(7. 19)	再度攻撃したが不成功	(7. 19)	全 左	(7. 19)	全 左	(7. 19)	全 左	
	(7. 21)	アフアのツル陣地に対し 79i の左に北向きに併列、敵前至近距離に攻撃を準備し 1600 攻撃 第 1 線は米陣地に侵入したが進展せず約 50 米で対峙、攻撃を繰返し逐次敵陣地を蚕食したが、ジャングル草等をかじりながらの激闘は必然的に損害が累加し火器の損耗、弾薬の欠乏と相俟って全く悲惨な戦況となって行った。以後ジャングル内の混戦を繰返していた。	(7. 21)	全 左	(7. 21)	全 左	(7. 21)	全 左	
○ ツル、サギ陣地に対しては海岸地区から転用された 41D が担当 附図第 15	(8. 2)	聯隊中より 50 名を以て加藤大隊を編成し歩兵団長指揮の下に川東大隊/78i (約 60 名) と共に薄暮ハト陣地を攻撃し、その後縁まで進出して爾後の攻撃を準備した。ジャングル内、不斉地における混戦乱闘、彼我共に状況不明と云う状態では状況を有利に進展させる為の具体的な手段も仲々判らず第一線指揮官の心境は全く容易ではない。司令部幕僚等が何ら具体的支援の手段もなく「もっと早く進展させよ……」等 図上戦術的に第一線を督励する程生易しいものではない。							

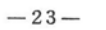
部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信)	第 1 大 隊	第 2 大 隊	第 3 大 隊	摘 要
○軍は 8 月 3 日 1330 作戦中止を発令した。 20Dの離脱撤退は 8 月 5 日朝と定められた。 (41Dが撤退掩護) 不屈山北側經由木浦村, 金泉村, 竜山地区に集結 附図第 13 ○ 41Dは 19. 9. 5 238i (19. 9. 17 D主力) 山南地区に転進 青津支隊残置 ○ブーツ西方地区の戦闘 ○軍旗の奉納	19. 8. 5 聯隊の残存第一線兵力は約 100 名 (?) 以下に激減したが, なおも軍旗を捧じ, 団結を保ち, 精一杯の敢闘であった。 19. 8. 29 命により逐次敵と離脱, 歩兵団司令部と共に米子川上流, 次いでマルジップ付近でサクサク採取後ブーツに向い機動した。 19. 8. 29 聯隊はブーツ地区警備を命ぜられた。 (78i : ボイキン, 79i : ダグア) 19. 9. 1 ブーツ地区集結完了。 陣地占領 2ヶ大隊に編成改編, 附図第 2, 13, 17, 19 ⊗この間 海岸地区では 青津支隊 (41iB) は東進する敵と戦闘しながら逐次後退していた。 附図第 2, 13, 18, 20 19. 10. 末 ウラウ付近 19. 12. 中旬 ゼルエン岬〜バルブの線 20. 1. 14 頃 サルップ〜マリン 20. 2. 下旬 ソナム河右岸 毎日 栄養失調兼病死者が続いた。 20. 1. 上 師団命令により聯隊内の健兵 (比較的) 40 名で深田中隊を編成し青津支隊に配属 (1 月 16 日 現地着) 附図第 18 20. 3. 上 軍旗を師団司令部に奉納した。	19. 8. 5 全 左 19. 9. 1 大隊長 鮫島中尉 陣地占領 20. 1. 2 全 左	19. 8. 5 全 左 19. 9. 1 大隊長 安部大尉 陣地占領 約 180 名 沢村中尉を長として耕作隊をサブルマンに派遣して土人の廃園に甘藷の耕作に当らせる等 食糧の確保に努力した。 〔 5 中隊長 宇田中尉 6 中隊長 沢村中尉 7 中隊長 佐藤努中尉 〕 20. 1. 上 全 左 20. 2. 中 ソナム警備隊前面に進出した敵を攻撃するためブーツの陣地を撤し西進戦闘 (ソナム南方) 附図第 19 20. 3. 上 健兵を以て, 2.5 日を要して軍旗を師団司令部に奉納 当時 大隊兵力 約 150 名	19. 8. 5 全 左 19. 9. 1 編成改正により消滅	○中嶋中尉 (55 期), 永田中尉 (全他 多数戦死) ○聯隊砲中隊 高橋中尉 (釜山出身) 疲労困ぱいしてジャングル内を後退中 Ⅱ川嶋主計中尉に出会ったが遂にブーツには現われなかった ○ 5 中隊長 宇田中尉戦死 ○黒崎大尉 (元第 11 中隊長) 20. 4. 初 サブルマンにてマラリヤ兼脚気で死亡 ○佐藤長太郎大尉 (ⅡMG 隊長) サブルマンにてマラリヤによる脳症にて死亡

部隊区分 全 般	部隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)	第 1 大 隊	第 2 大 隊	第 3 大 隊	摘 要
○ 20. 2. 6. 軍は青津支隊及び第21飛行場大隊を20Dに配属して海岸方面の作戦を20Dに担任させた。 (2月10日以降) ※青津支隊は5月15日軍直轄となる。 ○ 軍は玉砕命令を発令(20. 7. 25)	20. 3. 15 師団命令により青津支隊長(ブーツ地区隊長)の指揮下に入りブーツ地区の戦闘 20. 3. 17 ブーツ放棄, 次いでブーツ南方高地(ブーツ〜オクナール〜ウィフン), 続いて山南地区の戦闘を継続 附図第20, 21 ※アレキサンダー山系以南の戦闘ではカボエビス以東の灌木を交えた粗林の中が主な戦闘地域だった。当時の歩八〇所属人員は数十名で配属されていた部隊は1大/26A(大砲はなく騎銃1/3人位)船舶工兵1中, 野戦病院1隊飛行場整備中隊1, 歩八〇にLG.MGなく小銃弾30〜50発/各銃手榴弾1/各人(殆んど太郎以来のもので恐らく半数程度は不発のものだったと思う)これらの状態は概ね終末の様相と云うべきであろう。 制空権は勿論常時100%敵にあった。砲兵や航空機の支援なく, 重火器なく, 武器弾薬の補給なく, 歩兵の人員も僅少, 食なく, 体力なく, ととても真面目な攻撃など出来なくて, 専ら遅滞防禦戦闘であり時たま夜間の殴り込み奇襲位であった。 ※土人による歩哨や陣地に対する襲撃がしばしば発生して悩まされた。ジャングル内の行動で絶対に音を立てない。 歩哨は昼間数米に接近されても発見出来ないで当初はよく損害を受けた。	20. 3. 15 全 左 20. 3. 17 全 左	20. 3. 15 全 左 20. 3. 17 全 左		○ 水無川地区では多数埋葬 ○ 水無川糧秣交付所でⅡ経理室城島主計軍曹, 大屋上等兵マラリヤと下痢のため死亡 ○ 菖蒲嘉八少佐(元第2大隊長)オクナールを経て山中に入る途中 三国峠付近で病死 ○ Ⅱ田中少尉は山南への途中増水の川に流され死亡

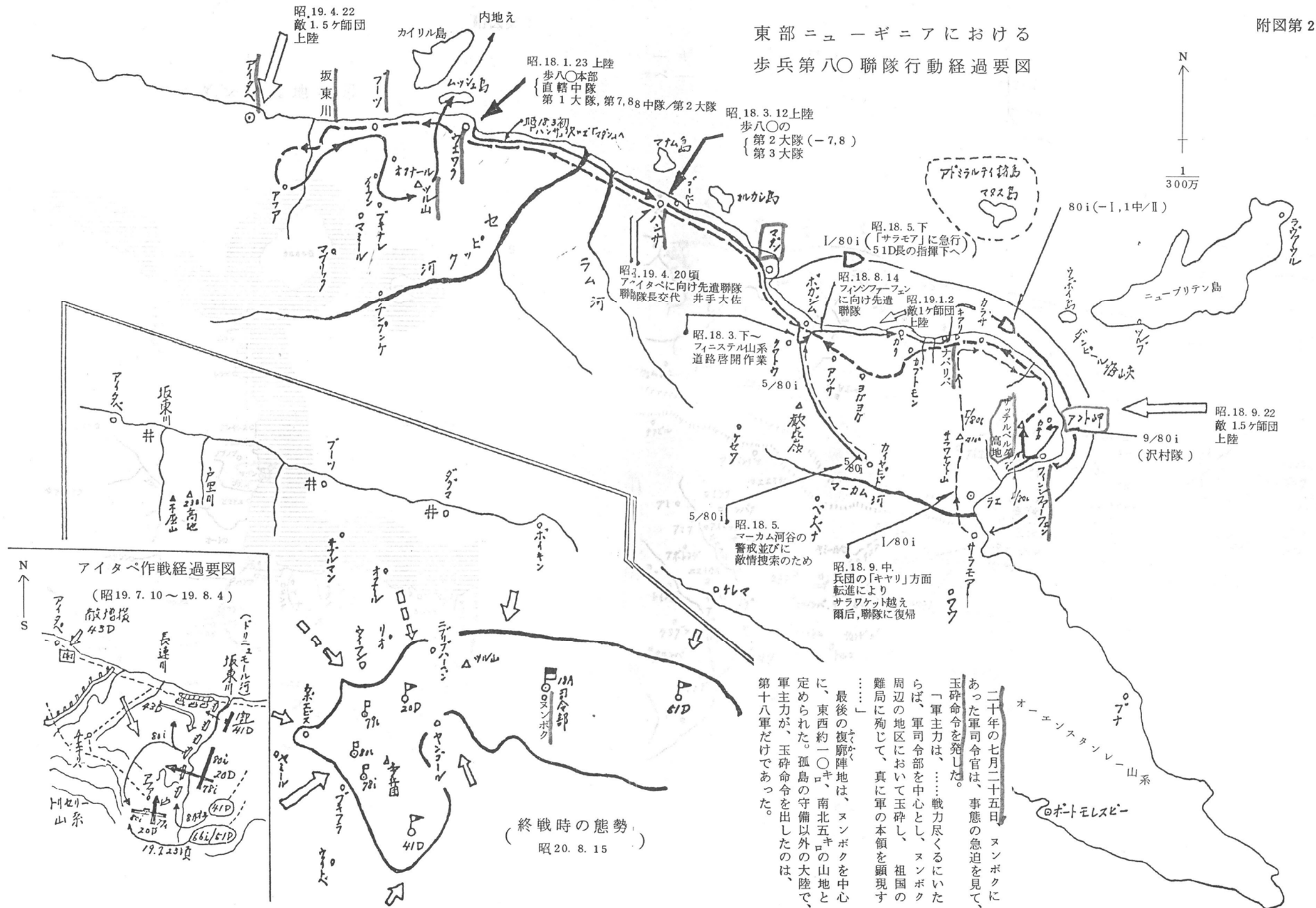
部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)	第 1 大 隊	第 2 大 隊	第 3 大 隊	摘 要
○ 軍 旗 の 奉 焼	20. 9. 末 (?) 海岸における降伏の為の出発が近づいていたので歩八〇聯隊団結の核心であった軍旗と永遠のお別れを実施した。 1. ジャングルの中を約 50m 平方位に伐開して部隊は 4 角の 3 辺にコの字形に整列し聯隊長の「捧げ銃」の号令で最後の敬礼。 2. 竿頭の御紋章、旗、旗竿を分離して、先づ旗及び旗竿を予め準備した薪の台上に奉置し全員の注目する裡に点火 奉焼した。 3. 次いで御紋章は直径約 30cm、深さ約 1m の穴の底部に手榴弾 7 ～ 8 発を置きその上に御紋章を置き、旗及び旗竿を奉焼した灰をその周囲に入れ、全員低姿勢で見守る裡に別の点火した手榴弾を投入して誘爆させ爆砕した。 4. 暫らくして穴の中を確認したところ細分され原形を認めない状況であったので丁重に穴を埋め附近の草等で擬装した。 拝受以来、先輩諸士が築かれた輝やかなしい伝統と歴史を有するこの軍旗を奉じて昭和 18 年 1 月 5 日夜大邱を出発して以来、東部ニューギニアにおける悪戦苦闘の連続であった 2 年半余の間 常に我等の心であった軍旗とこの南溟の地ツル山西南ジャングルの中で永久のお別れをした。	20. 9. 末 (?) 全 左	20. 9. 末 (?) 全 左		
○ 海岸地区に移動、 武装解除を受け ムッシュ島に収容 された。	20. 9. 末 (?) 命により 10 日余を要してボイキン付近の海岸に移動、武装解除の上、上陸用舟艇で約 40 分のムッシュ島に収容された。建制を保ったまま各隊毎にジャングルの中に掘立小屋を建てて自活に入った。豪軍が支給する 1 日/人当り食糧は 米 7 ～ 8 勺、オートミル約 1 合、メリケン粉約 1 合程度であった。不足分はジャングル草等に求めた。当初椰子の実の配給があったが永く続かなかった。この間、栄養失調、マラリヤ等で約 60 名死亡した。収容された時殆んど全員が病人同様であった為内地への帰国が待てず不帰の客となって行った。	20. 9. 末 (?) 全 左	20. 9. 末 (?) 全 左		※ 聯隊本部はラヴァウル行に 備え最少限の人員を指定した。 陣容は 7 名 聯隊長、聯隊副官 本部書記 2 名、伝令 2 名 高級軍医

部隊区分 全 般	聯隊本部及び直轄中隊 (聯隊砲・作業・ 速射砲・通信・)		第 1 大 隊		第 2 大 隊		第 3 大 隊		摘 要
○ 帰 国	21. 1. 中 (?)	○帰還船到着 帰国 第1次：第2大隊 第2次：聯隊本部，全直轄中隊，第1大隊 聯隊本部はフィンシファーフェン西北サッテルベルグ高地の戦闘の際の豪兵2名の捕虜行方不明の件について戦犯容疑指定を受けていたが第2次引揚船「鳳翔」が出発する前日夕解除となり第2次と共にソロモン地区に廻りその先発者を乗せて太平洋を一直線に広島県大竹港に向っていたが同地に赤痢発生に因り浦賀に航路を変更し 1月31日夜入港	21. 1. 中 (?)	全 左 航空母艦「鳳翔」	21. 1. 16	氷川丸に乗船 帰国			※歩八○帰国時の人員 (以下区分は出衛時の所属) 聯本・直轄 33 第1大隊 28 第2大隊 本部 4 5中 6 6中 5 7中 2 8中 0 MG 0 第3大隊 27 計 105 内地への出発時は105名であつたが帰国のための航海中もマラリヤに因る黒水病，栄養失調等のため内地の灯を見ずに死亡したものもある。(6名) 以 上
	21. 2. 1	夜明けと共に団平船に移乗して上陸した。 担架を持って出迎えた衛生兵の顔色は頬紅を塗ったように見えた。(自分達の顔色はドス黒い黄色気味でカナカ土人並のものばかり見て来た為だろう) 約1週間復員業務実施後，帰郷する者，入院する者に夫々別れ解散した。 ※その後，師団は静岡県伊東市において残務整理を実施した。 これには聯隊より下記の者が参加した。 中佐 内 山 日出丸 氏 少佐 安 部 隆 三 氏 少尉 森 西 守 氏 少尉 赤 野 秋 男 氏			21. 1. 24	浦賀上陸 復員業務 (韓国籍17名)			
					21. 1. 30	復 員			

附圖第 1

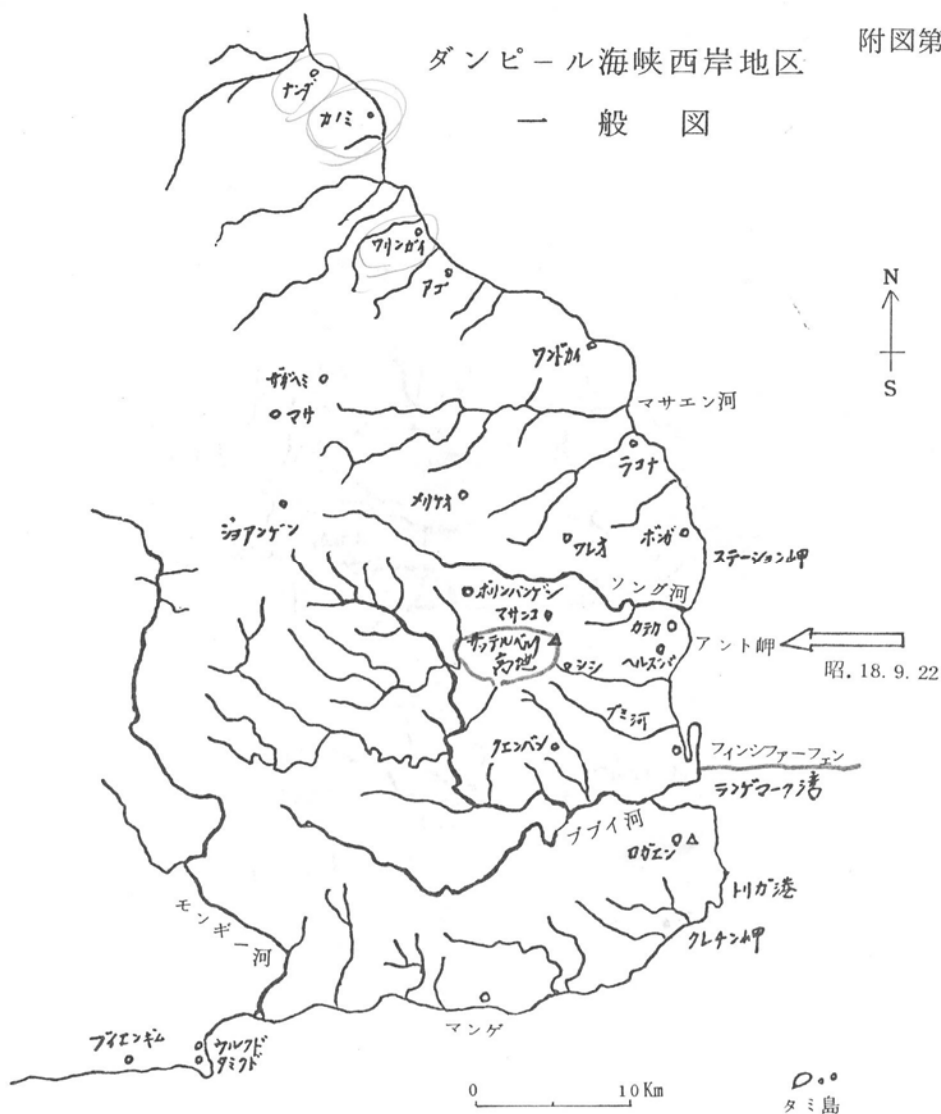


東部ニューギニアにおける
歩兵第八〇聯隊行動経過要図



ダンピール海峡西岸地区

一般図



昭. 18. 9. 22 敵 アント 岬上陸時、フィンシファーフェン地区における我兵力配置

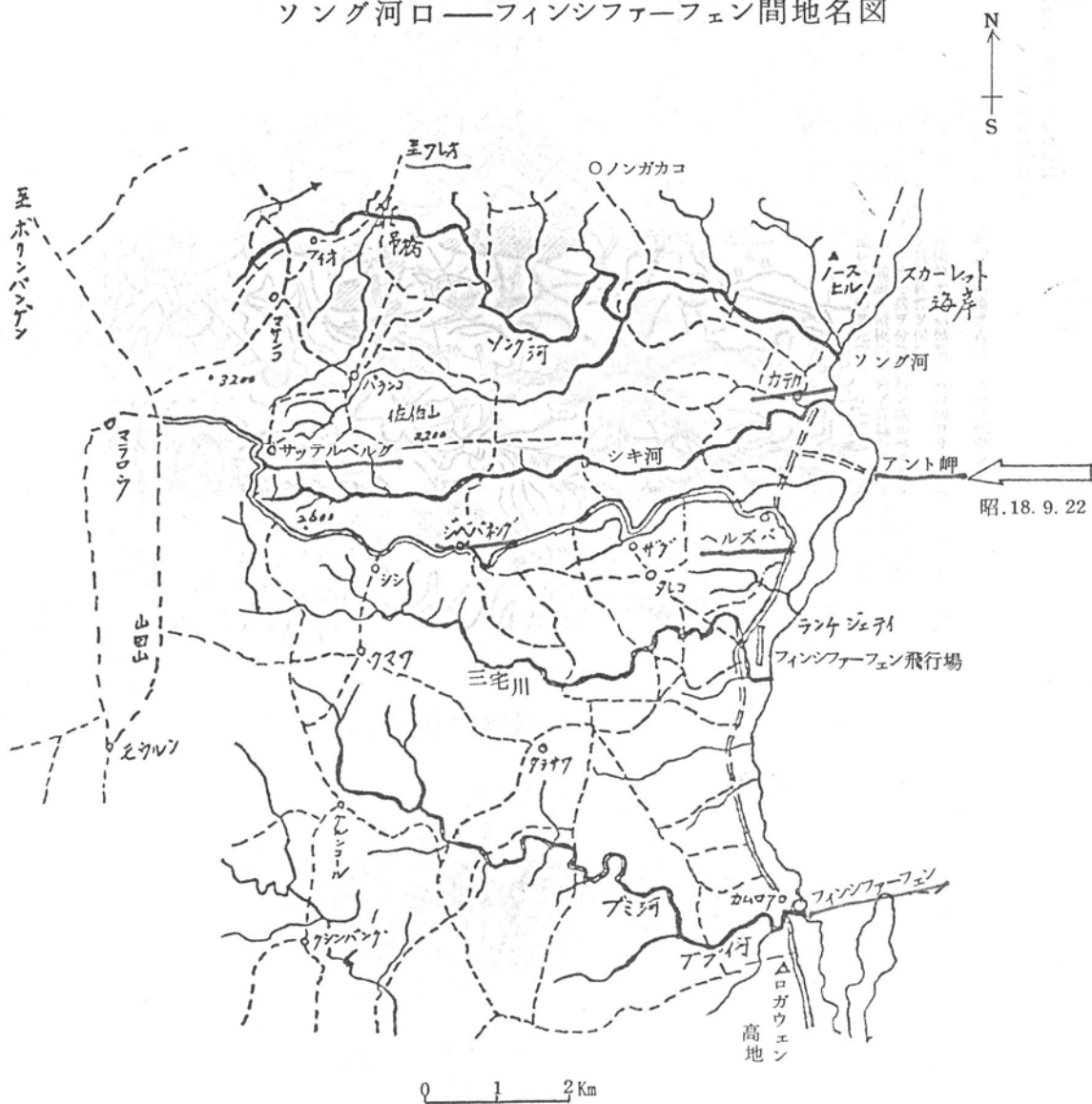
ロ ガ エ ン 高 地	80i 主力 (聯隊本部、直轄中隊、Ⅲ (-9, 12) (内山大隊))
モンギー河右岸地区	モンギー支隊 Ⅱ (-5) 80i (菖蒲大隊)
ア ン ト 岬	アント岬警備隊 9/80i+TA小, MG1小 (沢村隊)
ジョアングエン	ジョアングエン警備隊 12/80i (三宅隊)
モンギー河左岸及びマンゲ	2/238i (約100名) (熊谷隊)
タミ島警備隊	5/238i (約150名)
フィンシファーフェン	(第1船舶団司令部 (約400名)) 海軍第85警備隊

※ これらの他 後退して来た南海支隊の1部や所属部隊への追及者等 14~15の部隊の異なる集団があった。

(敵上陸直後80i本部に集った命令受領者の数)

附図第5

ソング河口—フィンシファーフェン間地名図



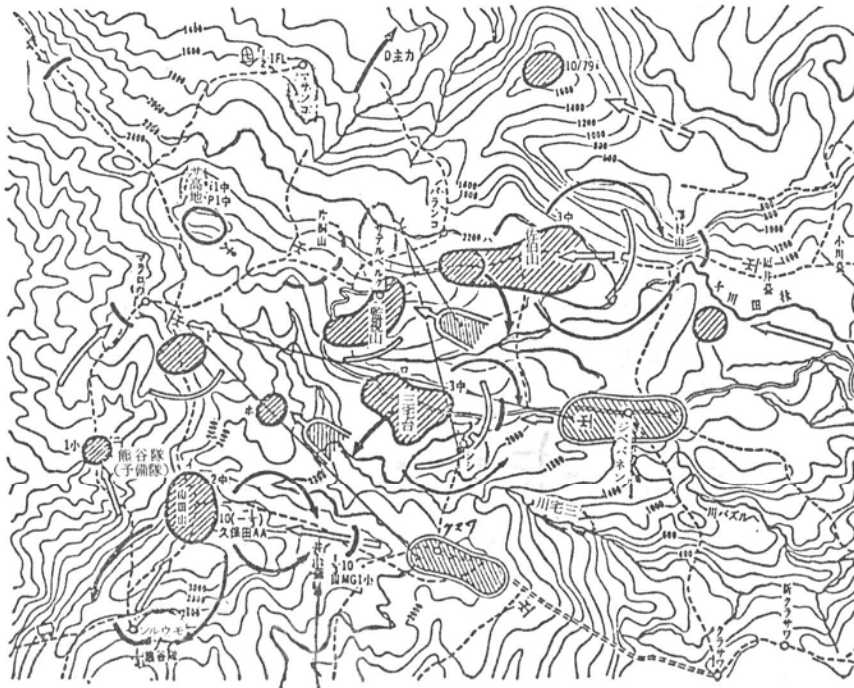
摘 要

- サッテルベルグ高地—ジベネ—ヘルズバ) 一車線程度の道路があった
- ソング河口—フィンシファーフェン海岸道
- ----- は畦道程度の土人道
- 一部の海岸地区を除きジャングルに覆われており、通過は少々困難
- サッテルベルグ高地の稜線は草原地帯、又は粗林

朝師作命甲第三七〇號別紙

「寸」高地確保計畫

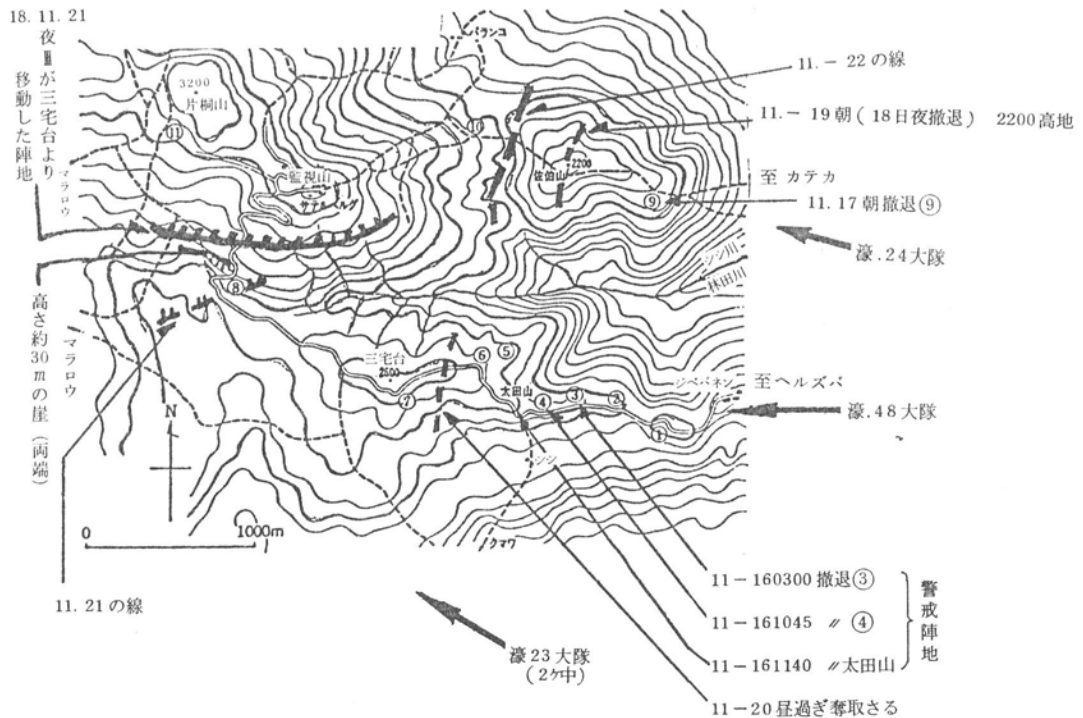
- 一、師團ハ三宮支隊ヲ以テ堅固ニ「サ」高地ヲ占領シ同地ヲ死守シテ師團閉居ノ作戰ノ自
由ヲ確保ス
- 二、陣地ヲ占領シ長時日ニ亘リ連日進發勢ナル砲臺擊下各方面ヨリスル地上攻撃ニ對シ陣地
ヲ確保シ得ル如ク堅固ニシテ且柔軟性ヲ保持ス
- 三、防禦範圍ノ各地區縱横ニ點メテ陣地守兵ヲ分散節制シ成ルベク多ク地區毎陣隊ヲ集結
貯存戰力ノ攻撃組織ニ點ニ點シ隨所ニ積積の選擧ヲ實施シテ敵ヲ殲滅スルコトニ勉
ムルモ狀況ノヲ許ササルニ至レバ復擧テ死守ス



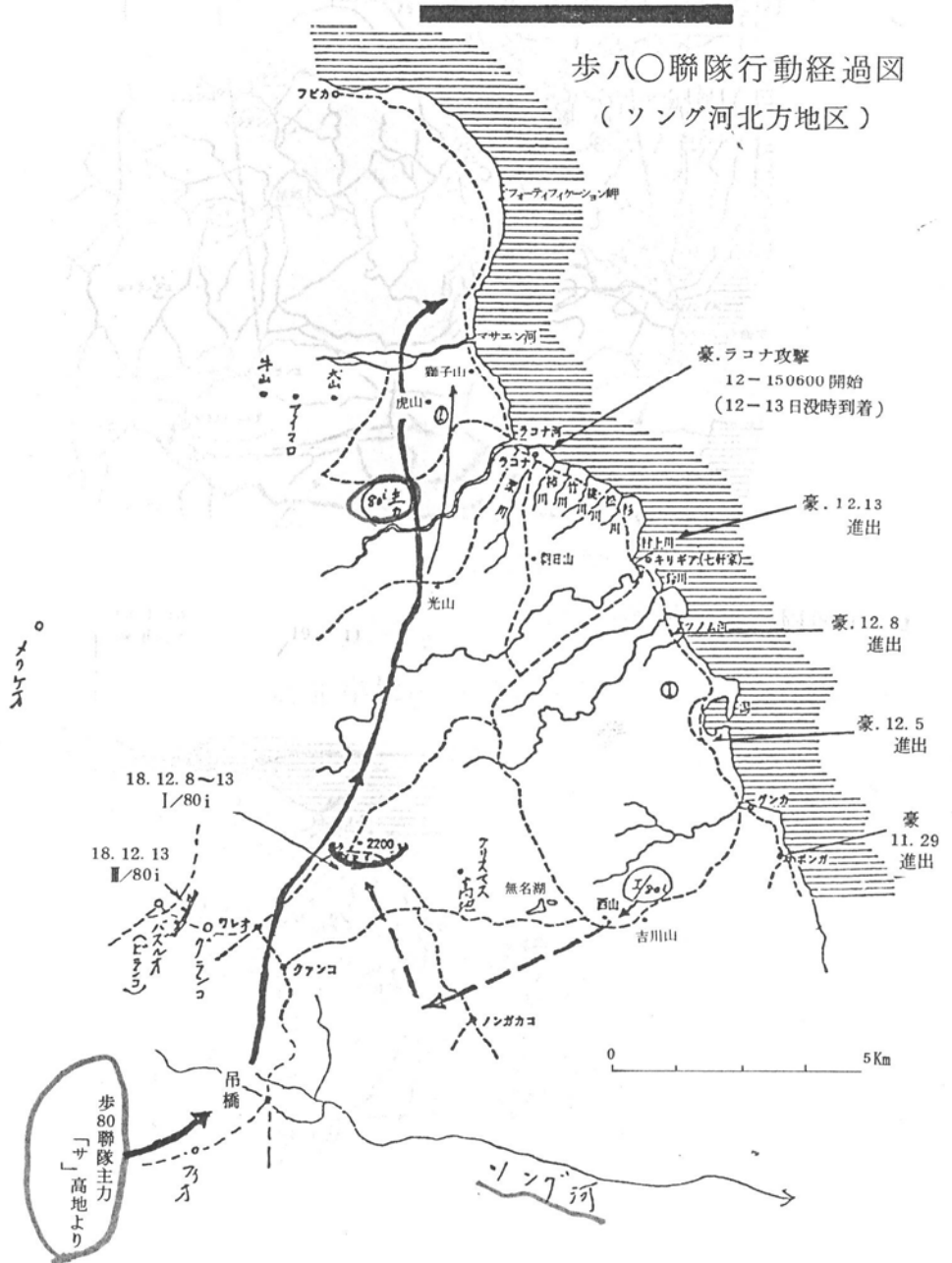
(井上台)

附圖第7

「サ」高地防禦戰鬪經過要図

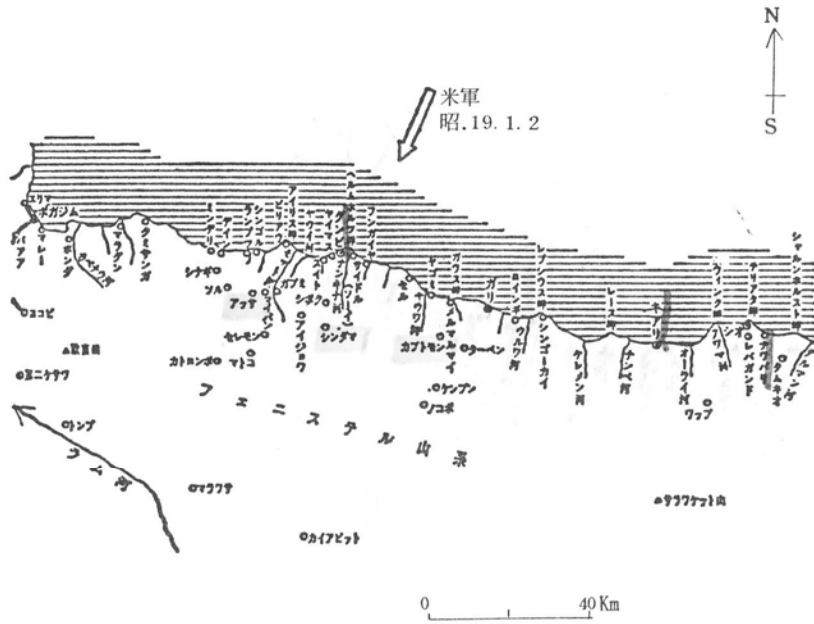


歩八〇聯隊行動經過図
(ソング河北方地区)



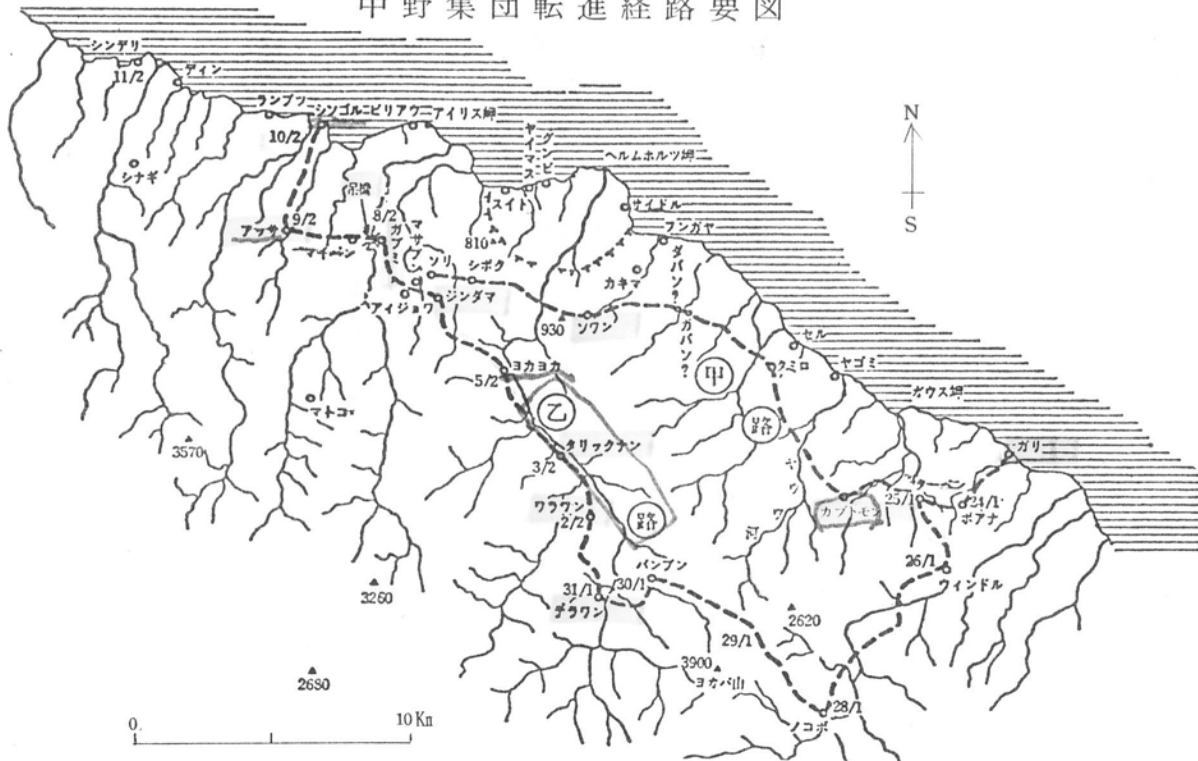
シオ←ガリ→グンビ地名図

附図第11

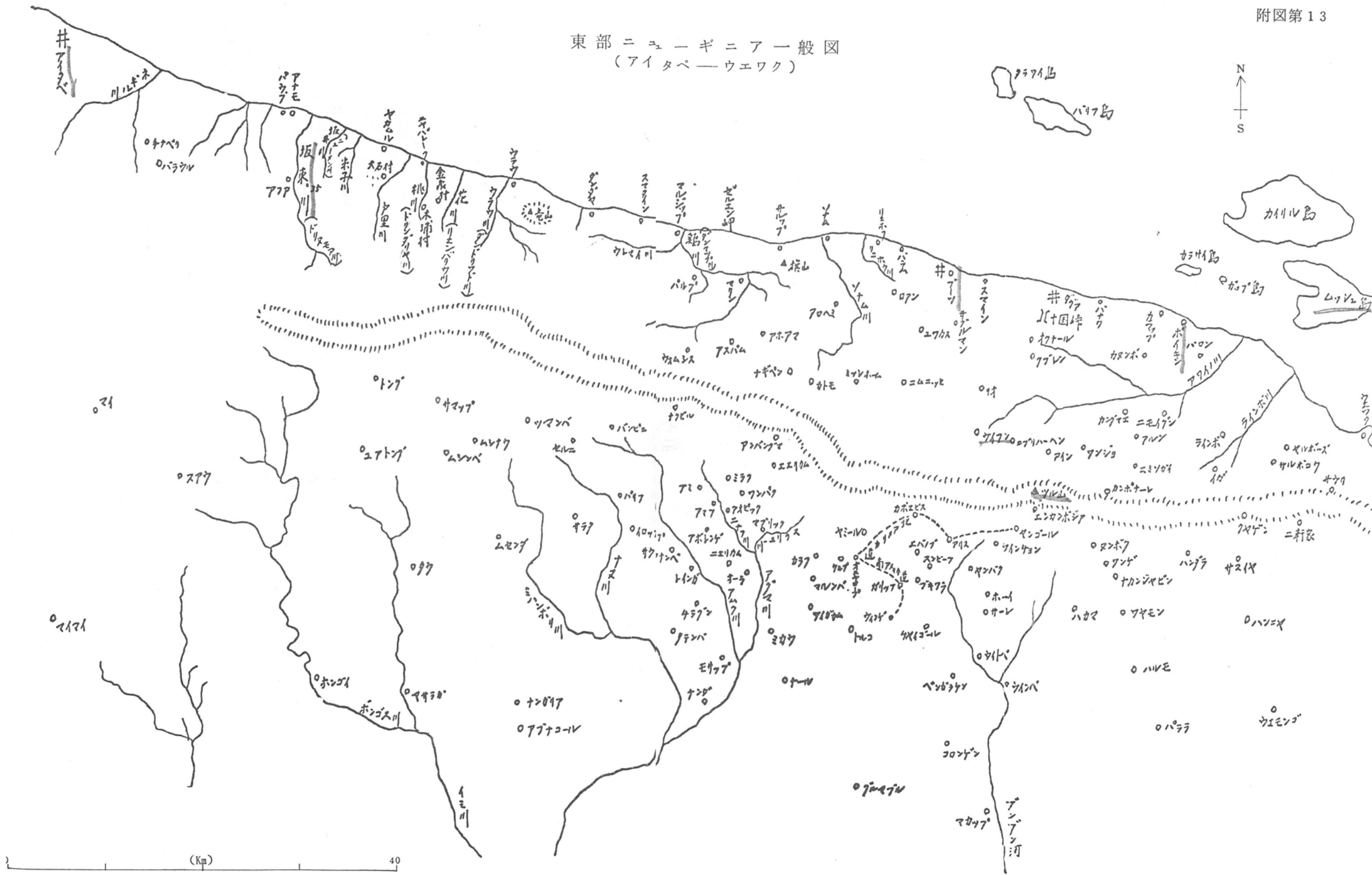


中野集團転進経路要図

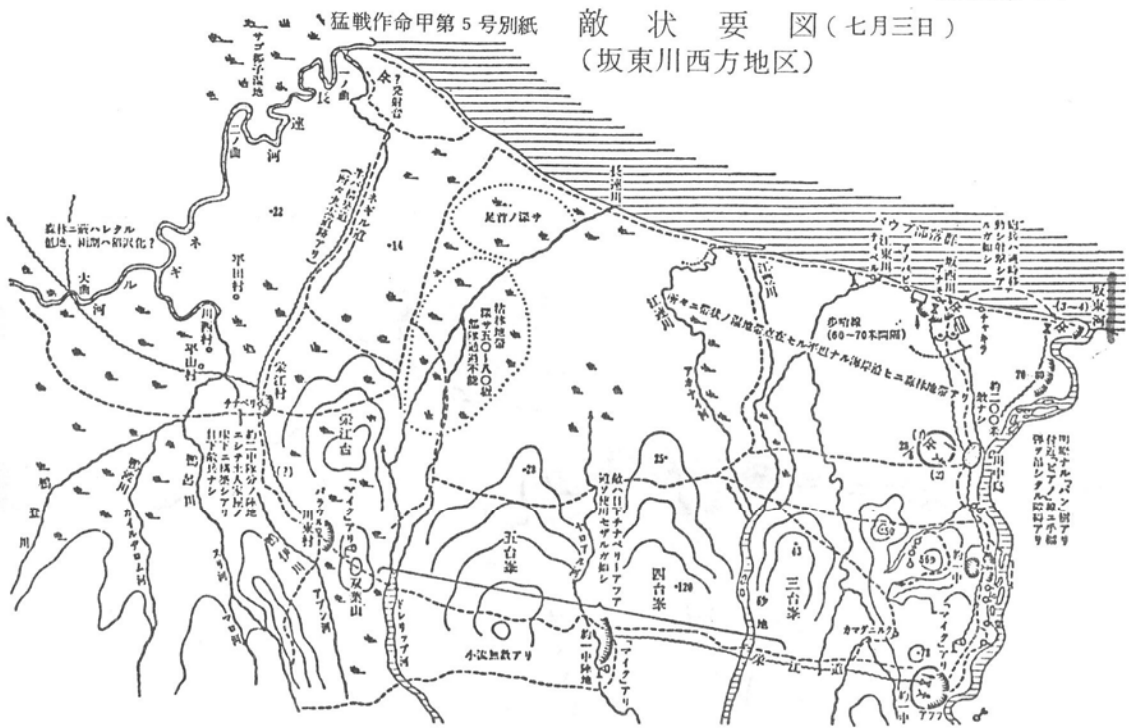
附図第12



東部ニューギニア一般図
(アイタペーウエワク)

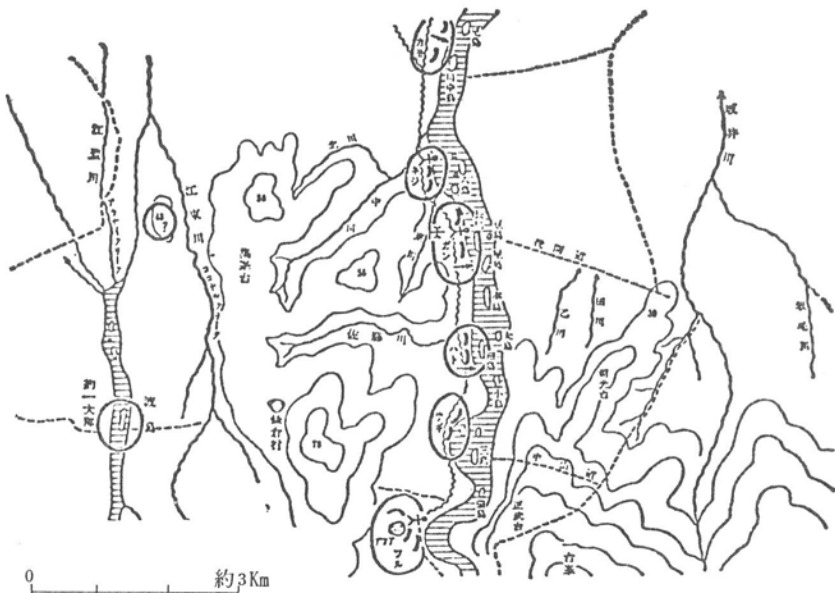


附図第 14



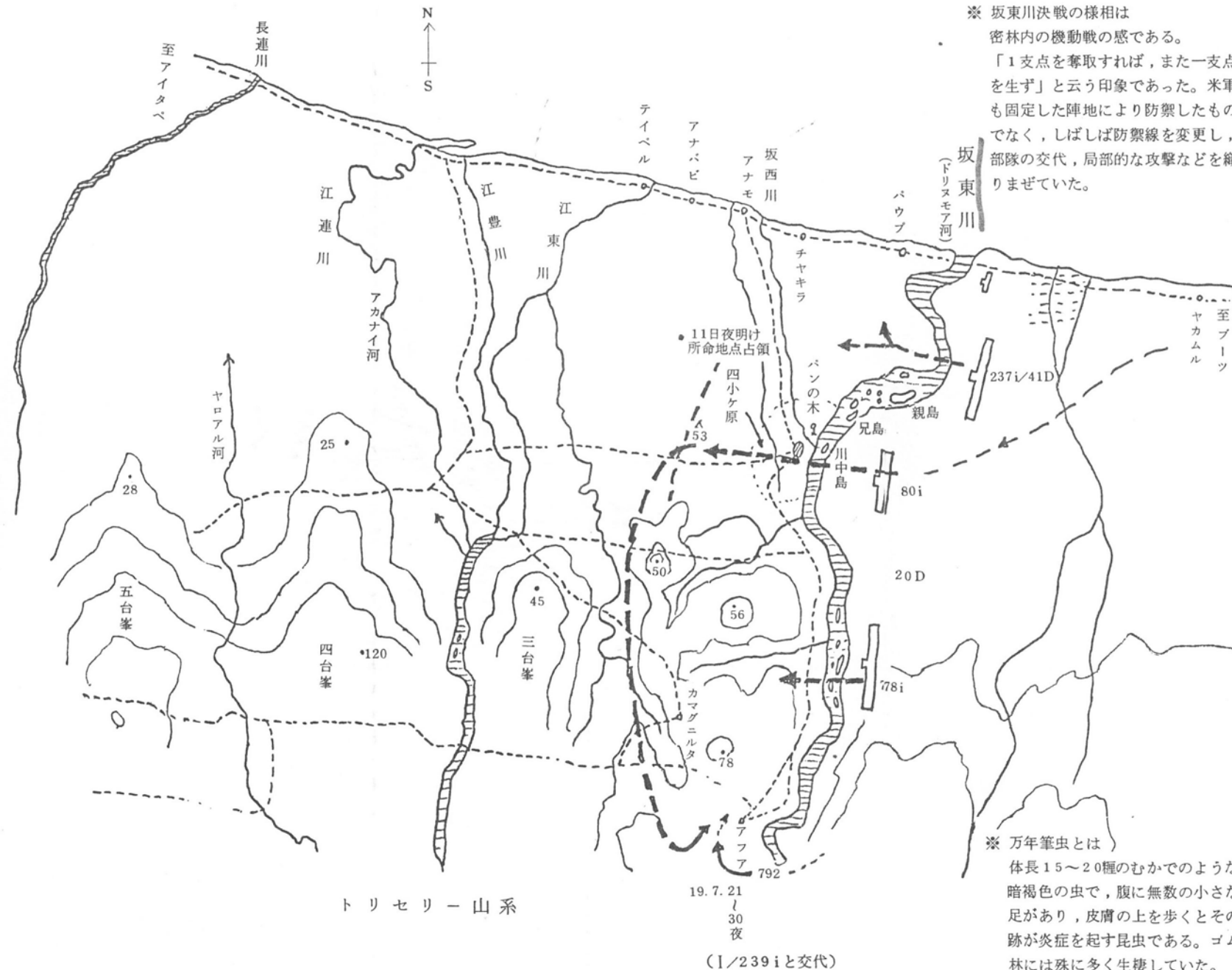
附図第 15

坂東河左岸敵陣地要図
(猛戦作命甲第 37 号別紙)
(19. 7. 26)



歩八〇坂東川の戦闘経過要図

(昭19. 7. 10~8. 4)



※ アイタベ作戦の主戦場は
アイタベの部落から東方に約30軒、
海岸に下ったドリヌモア川(日本名
「坂東川」)を中心にした数軒の地
帯である。

※ 坂東川決戦の様相は
密林内の機動戦の感である。
「1支点を奪取すれば、また一支点
を生ず」と云う印象であった。米軍
も固定した陣地により防禦したもの
でなく、しばしば防禦線を変更し、
部隊の交代、局部的な攻撃などを織
りまぜていた。

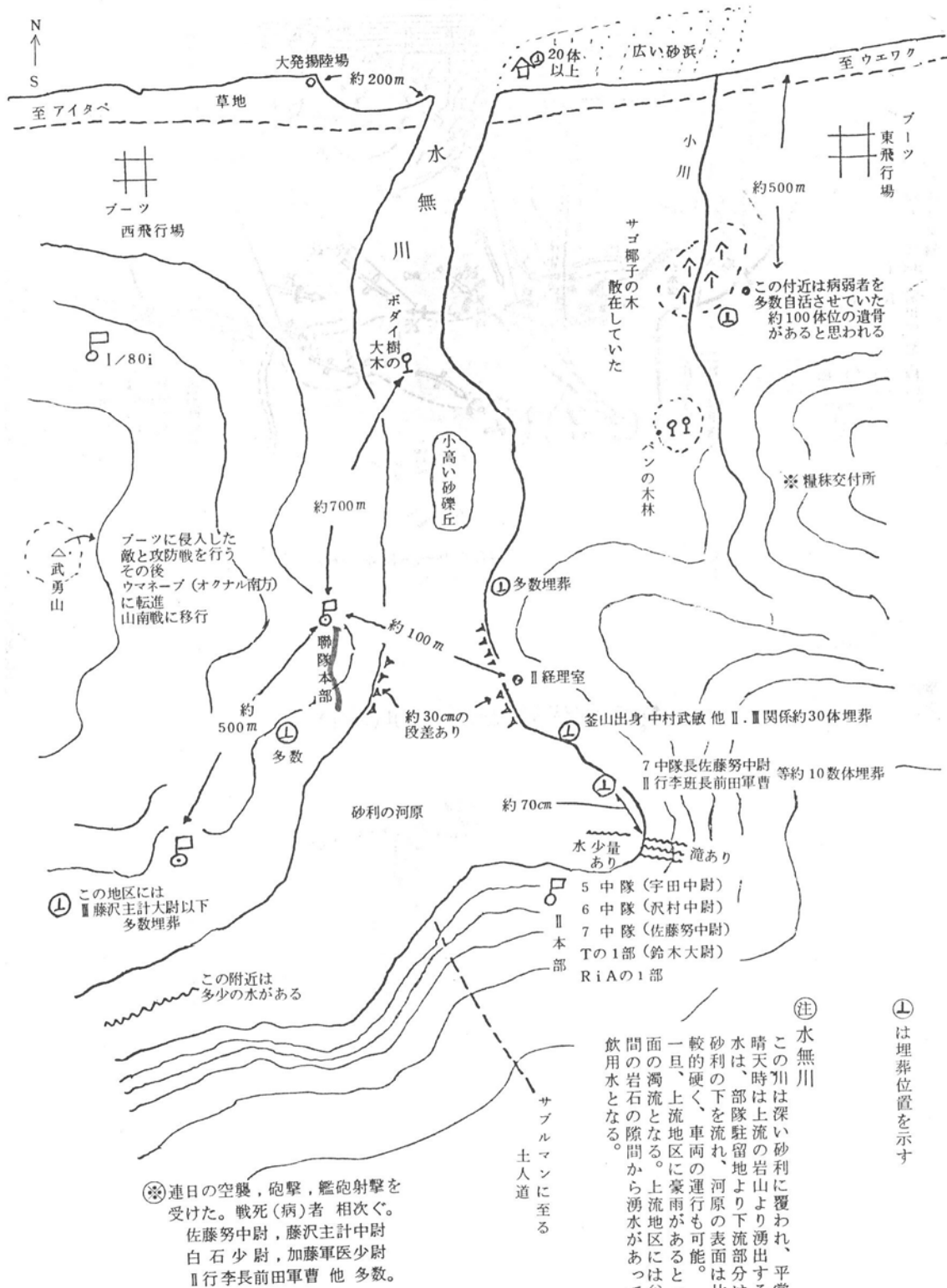
※ 万年筆虫とは
体長15~20mmのむかでのような
暗褐色の虫で、腹に無数の小さな
足があり、皮膚の上を歩くとその
跡が炎症を起す昆虫である。ゴム
林には殊に多く生棲していた。

※ 戦場附近の地形及び気象の概要

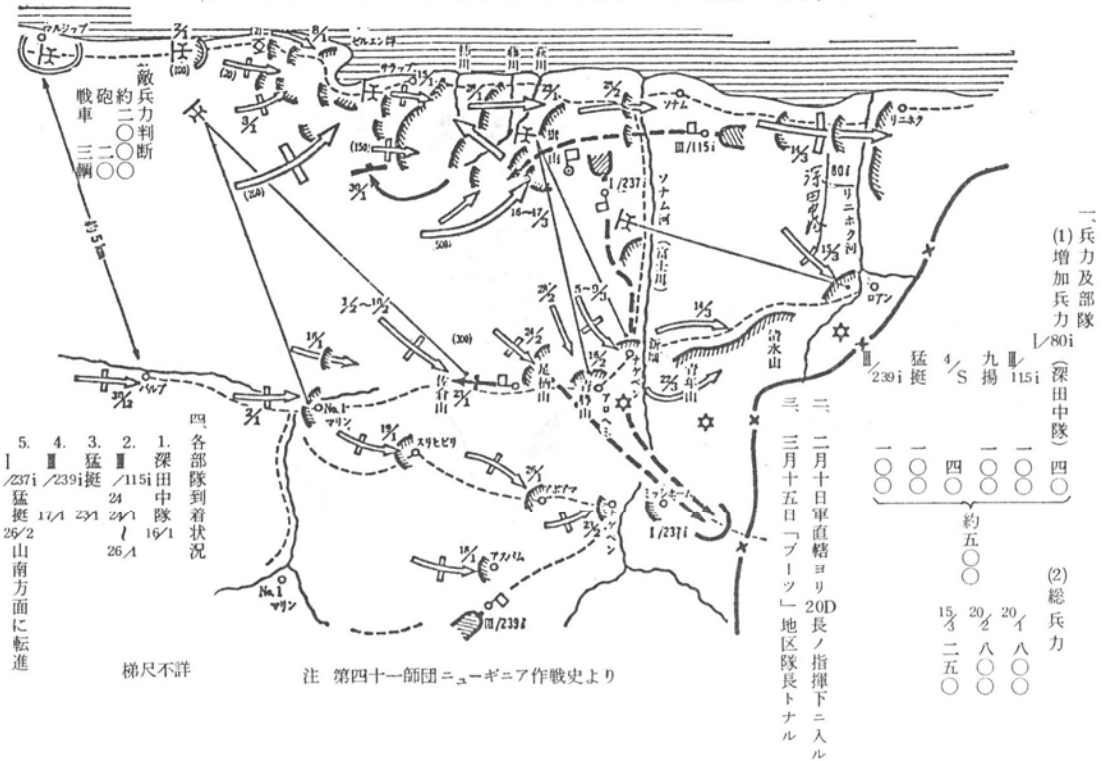
- 坂東川は日本側補給基地ブーツから海岸道で約75軒の位置にある。
- 全般の地形は、海岸まで迫っていたトリセリー山系の山麓が20Dが戦闘した
ウラウ付近から逐次南方に後退して、ウラウ西方約15軒の坂東河附近では、
海岸から5~6軒の平地を形成、アイタベ部落の南方地区では距岸20数軒
に及ぶ低湿地帯を作っている。
- 河川の様子は坂東川(含む)ブーツ間で作戦行動に障害を呈するものが10条、
その他多数の小流がある。いずれも川幅は300~500米、大部分は小石の河
原で草類が繁茂し、流線部は2~3条に分れていた。流速は2米内外、水深
0.5米程度が普通であるが、南方の山系地帯に降雨があれば急速に増水、氾
濫して流速も増加し、渡河ができなくなる。
- 坂東川はアファ附近まで大峡谷で、アファ附近から山麓界を離れて河幅を増
し10個内外の砂州があった。川幅はアファ附近で150~200米、下流の砂
州地区で300~500米。河底は小石で、平時の流速は1.5~2米であった。
兩岸の地形はアファ以北の右(東)岸は海岸まで顕著な起伏がなく、逐次平地
となっていたが、連合軍側が占拠した左(西)岸地区はアファから約25~3軒
の間が標高50~100米の高地、次いで平地となり海に及んでいた。
- 植生は、全地帯海岸にいたるまで密林におおわれ、河川に沿う地区、海岸湿
地帯等にはサゴ椰子林があった。森林は勿論対空遮蔽という点では完全であ
ったが、所々に湿地があり、伐開前進は可能であったが降雨があれば小部隊
の通過で湿地化が進み重材料の運搬ができなくなった。
- 道路はブーツから坂東川に至る間は、元来海岸道1本だけ。坂東川以西は、
アファ付近から山麓界北側に沿って更に東西に通ずるものが1条ある程度で
あった。
- 部落は主として海岸砂浜地帯に点在していたが、家屋の数は通常10数軒に
過ぎず、それも爆撃その他によって破壊され土人は逃避して皆無であった。
- 海岸は一般に砂浜が多く、波高は1~1.5米で 舟艇の着着は容易。
- 気象の特長は5月から6月中旬までは概ね1日1回のスコール、時には豪雨
と云う形であったが6月末から7月に入ると俄然連日の豪雨に見舞われた。
河川が氾濫し密林内は、いたるところ湿地を生じ宿営、機動、軍需品の集積、
殊に担送作業は至難を極めた。このような状況なので戦場附近も防空壕の構
築は一帯の浸水のため不可能となり、僅かに残る浸水しない場所は無数の蟻、
蛭、蚊、万年筆虫の集合場所となった。連日の雨で密林内は乾燥することも
なく陰湿不快の毎日で、又、兵器弾薬の発錆吸湿、通信線の地気短絡の発生
等 戦闘に甚大な影響を及ぼした。

水無川附近要図 (アイタベ作戦終了後ブーツ地区) 集結時 昭.19.9.1.~

附図第17

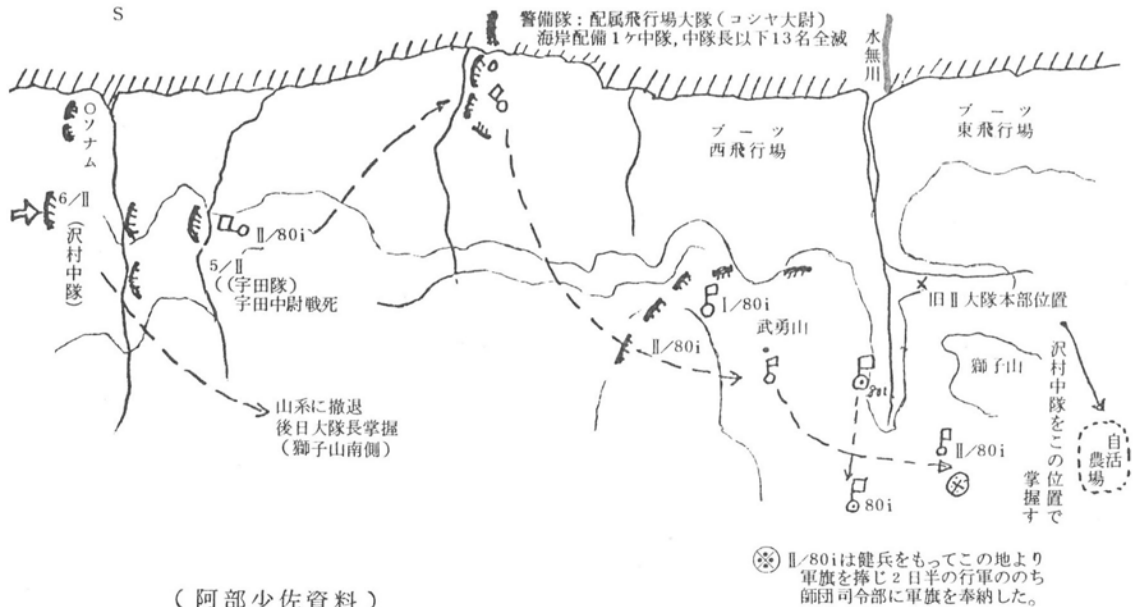


附圖第 18



附圖第 19

Ⅱ/80i ブーツ西方地区の戦闘経過要図（その地歩拡大を防ぐためブーツ飛行場、水無川の警備を撤し出撃したもの）

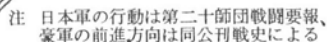


青津支隊ブーツ付近戦闘経過要図



注 第四十一師団ニ、ギニア作戦史より

第二十師団アレキサンダー山系南側作戦経過要図



20. 8. 1～カボエビス～エバノブの線

連 合 会 事 務 局 便 り

1. 本東部ニューギニア戦史は戦没者名簿の奉納式に因んで発刊の運びとなり
1,000部印刷しました。 発送希望の方は送料300円のみ負担下さい。
本史の発刊に当り 森 貞 英 之 氏に多大の協力を戴きました。
2. 板 東 利 夫 氏より、 その自費出版の著書、
歩兵第八十聯隊と支那事変（北支戦線） の寄贈を受けております。
希望の方は 送料200円 のみ負担下さい。
3. 加藤申一郎、川 島 五 郎 共著、歩兵第八十聯隊史（朝鮮第二十四部隊）を、
はと会（第五中隊会）より寄贈を受けております。
希望の方は 送料140円 のみ負担下さい。
尚、本著書発刊に当り 西 原 滝 男 氏に多大の協力を戴きました。
4. 連 合 会 名 簿 若干部数残っております。
希望の方は 送料200円 のみ負担下さい。

歩兵第八十聯隊史

(東部ニューギニア戦線)

印刷 昭和56年 1月11日

発行 昭和56年 4月18日

著者 古川 静 夫

発行者 歩 八 十 会 連 合 会

事務局 神奈川県大和市林間 1-3-10

南林間パールハイツ503 (〒242)

大曲 喜四郎 方

印刷所 東京都千代田区神田神保町 3-10

大 江 印 刷 工 業 社

(非 売 品)
